



Title	インドの婚姻規制
Author(s)	甲田, 和衛
Citation	大阪大学文学部紀要. 1972, 16, p. 57-160
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5671
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

III Canarese 村落における sister's
daughter marriage

1

Hullenahalli は、Mysore, Mandya の北に、約 10 miles のヒンドゥ村落である。総世帯数約 140世帯、カーストは4つにわかれる。それぞれの世帯数は表 1のとおりである。カースト別、したがって総世帯数ともに概数であるのは、本調査においては、ついにカースト内、あるいはカースト間の問題にたちいることが不可能であった事情に負っている。本調査は、'66年、考えられるかぎりにおいて、素養ある通訳 Mr. A. Seshadri Iyer の援助によって、実施することができたが、なおカーストのなかにたちいるには、村人の壁は厚かった。Mysore の村のカースト構成については、Srinivas¹⁾ の Rampura における、慎重な社会学的視角からの見事な分析がある。Hullenahalli を調査村に選定した理由の1つは、本村のカースト構成がこの地域におけるすべてのカーストをふくんでいたからである。

表 1

Lingayat	5
Vokkaliga	100
Harijan	20
Ganiga	10
そ の 他	4
Muslim	1
計	140

いま、Hullenahalli の隣接村落のカースト構成をみれば図 1のとおりである。隣接する10ヶ村の地区の中心は Sivalli であり、精米場、郵便局、小さな病院、映画館などすべてこゝに集まっている。Sivalli は4つのカーストからなっているが、うち Vokkaliga は2つの intermarry-circle にわかれる。その隣接村 Hadya の Vokkaliga も2つの intermarry-circle にわかれる。この両村の Vokkaliga を、いま Sv_1 と Sv_2 , Hv_1 と Hv_2 とすれば、この4つに分割される Vokkaliga は、図 2 のように通婚する。すなわち、 Sv_1 と Sv_2 , Hv_1 と Hv_2 の同じ村内の Vokkaliga 間の通婚はないが、 Sv_1 と Hv_1 と Hv_2 , Sv_2 と Hv_1 と Hv_2 の通婚、すなわち隣村の Vokkaliga のすべてと通婚する。図 1 の Jayapura, Malligeve, Madichakanahalli, Biliguli などの村々では、Vokkaliga あるいは Lingayat が村の majority group であり、minority としての Harijan が文字通り少数の村々にはこのような intermarry-circle の分割はみられない。Hullenahalli もこの intermarry-circle への分割がなく、しかもすべてのカーストをふくんでいることが、Hullenahalli 選択の第 2 の理由である。

調査村選定の企図に反して、Hullenahalli では Ganiga についてはついに面接不能、Harijan についても事情は同様であった。面接を強要した Harijan の 1人、2 acres を耕作する夫婦の

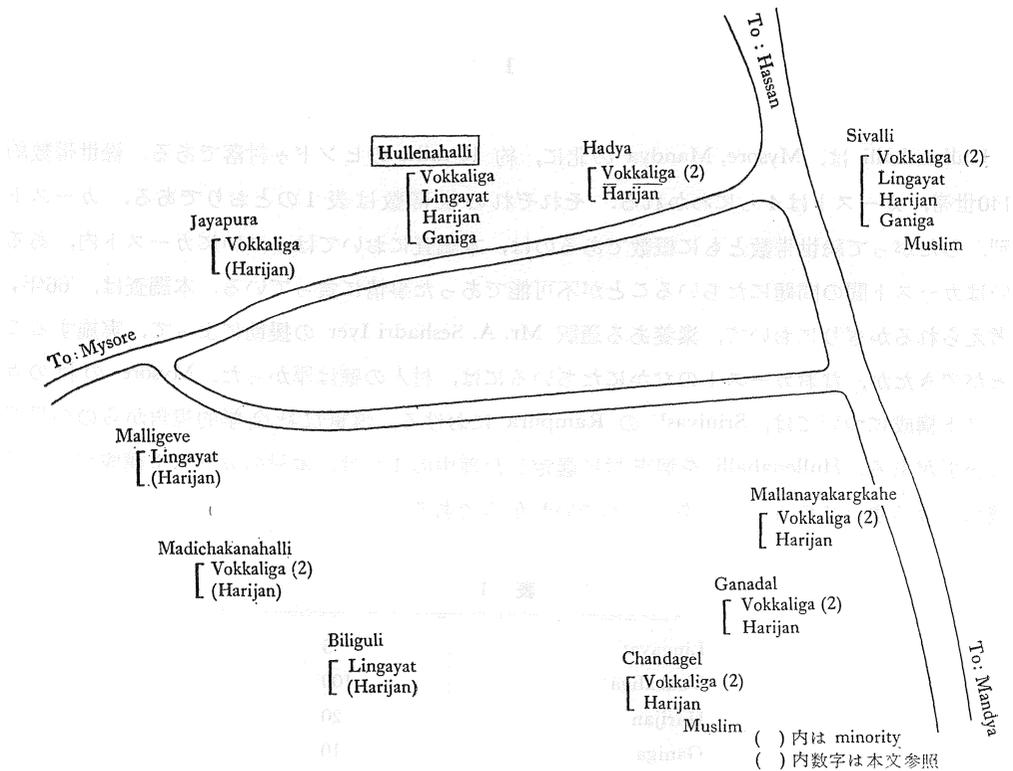


図 1

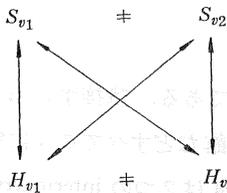


図 2

みの世帯，本人（35～40才と自称）は妻との関係を FZD と回答，周囲が FFFBSD と示唆すればそれも yes という．本人によれば，父も祖父もたゞ1人の男子をもち，兄弟姉妹はいない．本人の姉と妹の嫁ぎ先と，他村に住む未婚の弟についてわずかに回答するのみである．Hullenahalli にはたゞ1戸のムスリムが現住する．1年半前，Hosakeve（本村から約20マイル）から移住，マシン1台をもち，tailor を営んでいる．世帯主 Syed Mohidn（40才）は，父の3番目の妻の第2子，父の2番目の妻の姉の娘の娘を妻とし，3人の子供と世帯をもつ．前住地 Hosakeve に住む亡父の弟の長男は，亡父の最初の妻との間の3女，すなわち FBD を妻とする．ヒンドゥー村落のなかに孤立したムスリムは，I，東ベンガルのムスリム村落²⁾に孤立したヒンドゥーと好対照をなしている．Hullenahalli 近傍におけるムスリムは，それぞれの村にとって peripheral な存在にとゞまるといい

2

Hullenahalli の majority group, Vokkaliga は図 3 にしめす Lingayat の家屋と, Harijan,

Ganiga の地区をのぞく、本村のすべての地区にひろがって居住する。本村の Vokkaliga は、他の地域にみられるような sub-caste に分れてはいない。Vokkaliga の典型的な農家、Sri Narasimhe Gouda の例をみよう。図 4 の Javare Gouda は20年前に死去、当時、子供のない兄夫婦と同一家屋内に居住、約 50 acres を耕作した。この耕地は、死後、II, IV, V, VI の 2人、VII の 2人、計 7人の男の子に分配され、現在は、I が 2.5 acres (以下 acre)、II が 5、III が 2.5、IV が 5、V が 5、VI が 10、VII が 10 acres をそれぞれ耕作する農家である。農家

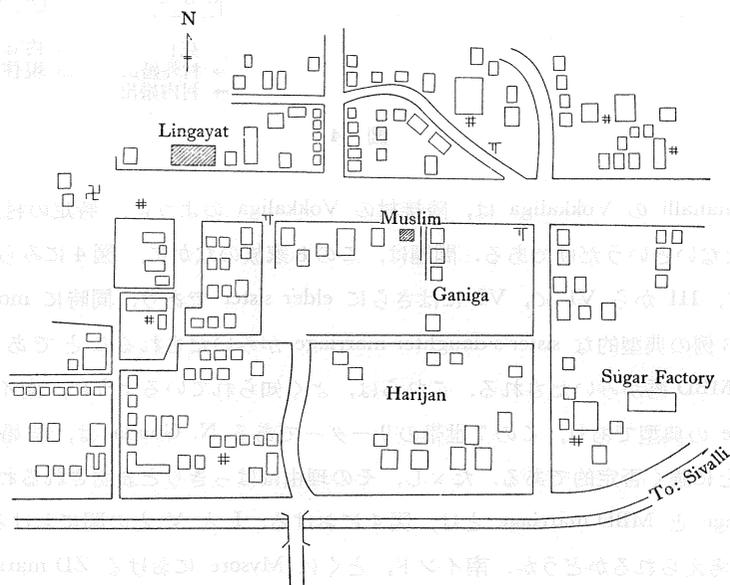


図 3

II の世帯主、informant, Narasimhe Gouda は15マイル先の他村から妻をめとり、23才の長男は現在官吏として Mandya に勤務、16才のとき両親の arrangement によって、2マイル先の他村から FFBSDD にあたる妻と結婚、長女のみ村内、二女は3マイル先、三女は30マイル先の他村に、それぞれ非近親婚として婚出した。農家 II には現在12才の年雇労働者、Harijan の少年が同居、食事、衣服を支給されて、ほかに年 Rs. 30、将来、耕作地に余裕ができれば貸与、独立させる予定である。農家 IV の2人の娘も他村への婚出、たゞし、長女は MFBS との結婚である。農家 VI は同一家屋内に居住するが、この2夫婦家族は、農耕もふくめてまったく独立の生計をたてゝいる。すなわち、それぞれ 5 acres ずつを耕作する。同居の43才の義母はすでに亡夫からの相続分の耕作を売却済みであり、son-in-law であり同時に younger brother である36才の世帯主と同居する。したがって農家 VI は、じつは2家族と数えられる。農家 VII、75才の老母は1人分の相続分をもって、末子と同居、死後それはすべての男の子に分配される予定である、という。

このように、これらの8家族のうちにおける婚姻は、決して村内に限定されているわけでは

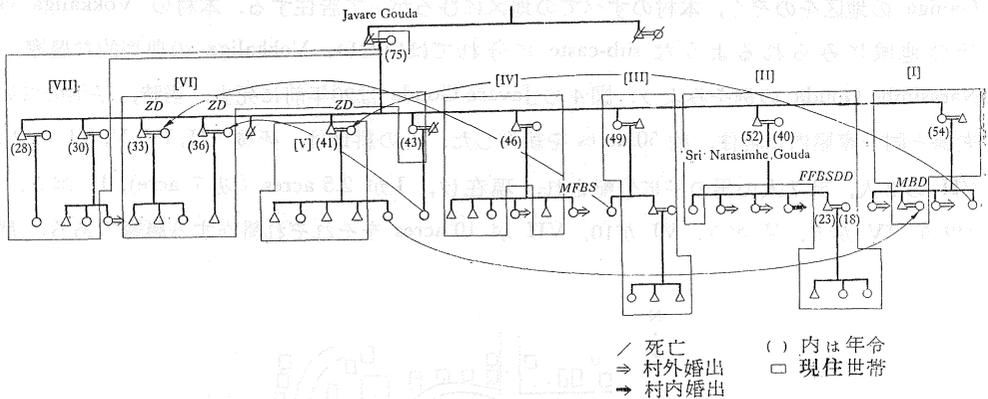


図 4

ない。Hullenhalli の Vokkaliga は、隣接村の Vokkaliga のように、特定の村外の marriage circle をもたないというだけである。問題は、この 8 家族のなかに、図 4 にみられるように、I から V に、III から VI に、VI にはさらに elder sister であり、同時に mother-in-law との同居、計 3 例の典型的な sister's daughter marriage がみいだされることである。そして V から I に、MBD 婚がみいだされる。これらは、よく知られているように、南インドにおける ZD marriage の典型であり、この 7 世帯のリーダーである N. Gouda は、結婚のサークルが拡大することに強く否定的である。たゞし、その理由ははっきりと表明されるわけではない。

ZD marriage と MBD marriage とは、図 4 における、I と V との間における、immediate exchange と考えられるかどうか。南インド、とくに Mysore における ZD marriage については、すでに Srinivas³⁾ の労作がある。Srinivas の ZD marriage についての説明には、2 つの大きな前提がある。1 つは dual organization であり、他の 1 つは matrilineal society である。第 1 の前提、Kannada の社会が dual organization をもっていたという挙証はない。Mysore においては、“……only one form of cross-cousin marriage viz. marriage with the mother's brother's daughter, is encouraged, while marriage with the father's sister's daughter is looked askance at.”⁴⁾ もともと Brahman にとっては、ZD marriage は理論的にタブーであり、“The creeper should not return” のルールから、FZD marriage は非難される。このことは、Kannada の社会がかつて matrilineal society であった、という第 2 の前提から、“In a matrilineal society, the maternal uncle is first and foremost a guardian of his sister's children. He becomes the father-in-law, or, the preferential mate of his niece when, perhaps, the matrilineal society is changing into the patrilineal.”⁵⁾ Mysore の ZD marriage は、その社会がかつて matrilineal から patrilineal に置換されたところに、その成立を負っている、と説明する。

Srinivas のこの 2 つの前提の提起には、あきらかに Ghurye⁶⁾ の影響をよみとることができる。こゝには、インド人類学の伝統をうけて、インド社会学を確立しようとした Srinivas の意図をうかがうに十分である。周知のように、Kannada の社会には、matrilineal の人々が現住

する。しかし、Kannada の社会がかつて matrilineal であった、という挙証もまた存在しない。問題は、Mysore における ZD marriage が MBD marriage にのみ結びつき、FZD marriage と共存しないかどうか、である。

3

Hullenahalli には Brahman は居住しない。Brahman の影響の有無にかゝりなく、Hullenahalli の Vokkaliga のばあい、FZD 婚は MBD 婚よりも少ないことは、図 5 の Manche Gouda の家族とその妻の実家の事例にみられるとおりである。ZD 婚 6 例（うち 1 例は父の 1st WB との婚姻）と、MBD 婚 6 例、FZD 婚は 3 例がみいだされるのみである。なお、こゝでつけ加えておかならば、この事例にみられるように、近時の若い世代においては、大きく非近親婚に向っている。Manche Gouda の兄弟 8 人のうち、本人の MBD 婚をのぞいて、他はすべて非近親婚であり、婚出入もすべて村外、通婚の範囲は親の世代よりもはるかに拡大する。

ZD marriage と FZD marriage とはどのように関係するか。南インドの親族組織—system ではなく organization—について、Karve⁷⁾ は clan-exogamy の原則から preferential mating の 3 つのタイプを列挙する。第 1 に、最優先して elder ZD が選択される。“A man's elder sister is given in marriage to a family which is led into an obligation to give the daughter of the marriage back to the family from which they had originally received the bride.”⁸⁾ ZD marriage は bride を貰い上げた家族に新たに bride を返すことを意味する。この principle of return によって、第 2 に FZD が選択される。たゞし、Karve がこゝに挙げる FZD 婚の事例は、FZD 婚が先行して、ついで ZD 婚、すなわち ZD=MBSD 婚の事例である。そして、第 3 に MBD、こゝでは“Vine or creeper must not return”によって、2 世代続く MBD 婚の事例が挙げられている。こゝには南インドにおける mating type の列挙があるのみであって、タイプ間の関係については一切問題とされていない。Karve の論稿全体にわたって、激しく批判した Dumont⁹⁾ もまたこの点を指摘する。

Dumont によれば、Karve は南北インドの親族組織について、cross-cousin marriage の有無について preoccupied であり、kinship terminology の差をみいだすのに overconcerned である。Karve の意図はたんに差異が存在するという truism に終わっている。“The North represents the principle of extended exchange, …… a wide circle of kin, a society having a pastoral economy or an agricultural economy supported by pastoral pursuits. The South represents the principle of immediate exchange, …… no sharp distinction between kin by blood and kin by marriage, greater freedom for women in a society which was mainly agricultural, with very few or almost no pastoral traditions.”¹⁰⁾ Srinivas の matrilineal society の場所に、Karve は pastoral tradition の欠如を導入する。このような“pre-sociological”な歴史的再構成によっては、南北

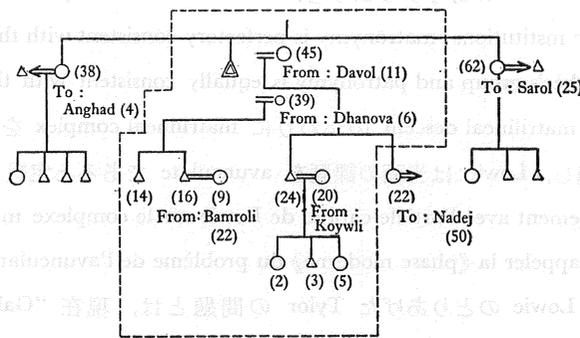
インドの親族組織の差異についても、また南インドにおける ZD と cross-cousin marriage の関係についても、説明することは不可能である。この点については、IV, Andhra Pradesh において後にふれる。

Karve の残した課題は 2 である。南北インドの親族組織についての traditional dichotomy は、第 1 に主題の限定、第 2 に確立した方法による再検討である。Karve の弟子、Gangopadhyay¹¹⁾ による Bengal の extensive sampling survey の結果、cousin marriage や exchange marriage が少数例であったとしても、その方法も成果もまた寄与するところが少ない。むしろ Srinivas¹²⁾ のように、cousin marriage が kinship level においてのみとりあげられてきたことに問題があり、その “political” effects への今後の研究を示唆することも 1 つの方向であるだろう。より直接には、たとえば Gould¹³⁾ と Gough¹⁴⁾ との研究をふまえて、Klass¹⁵⁾ は go-between が決定的役割を果たす arranged marriage に注目する。Bengal では、“It is true that he [=the Bengal villager] does not normally consider his spouse as kin, but it is equally true that he recognizes that nonkin—those absolutely unrelated—can never be spouses”¹⁶⁾ であるからである。婚姻規制に問題を限定しても、なおこれらの南北インドにおける特性の差異については、データの蓄積が必要である。

筆者も Klass と同様な事例を 1967 年 Gujarat の予備調査においてみいだしている。図 6 は、Baroda の北約 12 マイル Fazalpur の 1 例である。Rajput の Prabhatsing Gohil は 1st W を Davol から貰い、しばらく実家に帰し、その間 2nd W を Dhanova から貰っているが、2nd W の長男の嫁は、Anghad に婚出した妹がその Thakor に依頼、その紹介によって、とりまとめられたものであり、2 男の嫁は、1st W の yB が Davol に居住、その yBWB が Bamroli に居住、この 1st WBWB が go-between となっている。

Karve の残した課題に答え、われわれの ZD marriage と cross-cousin marriage との関係を

Sanabhai, Prabhatsing Gohil



△ informant
 () 内は年令
 地名の () 内は Fazalpur からのマイル数

図 6

明らかにするためには、Dumont¹⁷⁾ の鋭い指摘によれば、影響をうけているにもかかわらず、references として Karve が引用しない 2 人の著者—Radcliffe-Brown と Lévi-Strauss—にたちかえらなければならない。北インドの principle of extended exchange と南インドの principle of immediate exchange はたしかに Lévi-Strauss からの借用である。

4

cousin marriage を中心とするインドの婚姻規制について、そのさまざまな前史を省略すれば、問題提起は1907年、Rivers に始まっている。MB/ZS の関係は、Toda や Gond にみられる婚姻規制—cross-cousin marriage の survival である。“A feature of society which is quite inexplicable as a survival of mother-right becomes perfectly natural if it is a survival of the marriage regulation which still exists in many parts of India.”¹⁸⁾ したがって、“……it is a legitimate assumption that, …… the change from maternal to paternal descent took place much earlier than the disappearance of the cousin-marriage, and that the uncle-nephew relation is therefore more likely to be a survival of the latter than of the former condition.”¹⁹⁾ この婚姻規制の direct psychological explanation は不可能である。その manifold origins についての探究が人類学の課題である。こゝでは説明さるべき課題が説明の要因に逆転されている。

このような survival theory はなお根強く、Richards は economic hypothesis にたって、南インドの cross-cousin marriage は “……a sort of compromise between matrilineal succession and Brahmanic law; it preserves inviolate the principles of matrilineal inheritance under patrilineal forms”²⁰⁾ であると解釈する。これらの survival theory から脱却したのは、“the assumption of the priority of matrilineal institutions”²¹⁾ を模索した Hartland にたいする Lowie 批判によってである。Lowie によれば、Hartland の所論はすでに Tylor²²⁾ の提起した問題—matrilineal descent と matrilineal residence との間の alleged correlation—とたまたま一致する。“stock o anthropological romance” に寄与するよりも、“……it is unnecessary to assume the sequence from agnatic to cognatic institutions; matronymy is perfectly consistent with the assignment of definite functions to the father's group and patronymy is equally consistent with the avunculate”²³⁾ と考えるべきである。matrilineal descent のかわりに matrilineal complex を導入しなければならなかった誤りを指摘し、Lowie は当面の課題を avunculate であると定置した。Lévi-Strauss が、“En fait, c'est seulement avec l'article capital de Lowie sur le complexe matrilinéaire que s'ouvre ce qu'on aimerait appeler la 《phase moderne》 du problème de l'avunculat”²⁴⁾ と評価するところである。たゞし、Lowie のとりあげた Tylor の問題とは、現在 “Galton's problem” として Naroll²⁵⁾ の追試しつづけている問題である。

この avunculate の内実があきらかになるには、1924年、MB/ZS の行動様式とその extension についての著名な Radcliffe-Brown の論文をまたねばならない。しかしながら、その “exten-

sion' が、母にたいする行動様式は the group of maternal kindred as a whole に、父にたいするそれは the whole of the father's group に、extend²⁶⁾ するかぎり、いいかえれば、“……when a society is “disbalanced,” in the sense that the relational content of the paternal and maternal dyad is distinguishable, ……The “disbalance” in Radcliffe-Brown's view is related to the system of descent. Patriarchal relations are found with patrilineal descent, and matriarchal with matrilineal”²⁷⁾ とならざるをえない。F/S と MB/ZD の関係による Radcliffe-Brown の descent group theory にたいして、Lévi-Strauss は B/Z, H/W, F/S, MB/ZS の関係から、1945年、l'élément de parenté を措定した。“On n'a donc pas besoin d'expliquer comment l'oncle maternel fait son apparition dans la structure de parenté: il n'y apparaît pas, il y est immédiatement donné, il en est la condition”²⁸⁾ MB/ZS の関係—“鬪牛士のケープに猛然とダッシュするように²⁹⁾”，社会学者を魅惑させた主題—Rivers がその犠牲である—は、こゝで MB が親族に所与の存在とされる。

この所与の MB の役割と cousin marriage, ZD marriage はどのように関係するか。Nambikwara の mariage oblique を Lévi-Strauss は、Tupi の古い2つの婚姻形式から説明する。“……mariage des cousins croisés, et mariage avunculaire. Le premier apparaissait normalement sous la forme d'un échange de sœurs entre deux cousins croisés; le second résultait d'un privilège sur la fille de la sœur exercé par le frère de la mère, ou concédé à celui-ci par le mari de sa sœur”³⁰⁾ 他の南アメリカの事例を参照すれば、“Nous venons d'établir l'équivalence des termes 《beau-frère》 et 《oncle maternel》 dans un système de mariage entre cousins croisés joint au mariage avunculaire”³¹⁾ B-in-law と ZD marriage の関係はつぎのとおりである。B-in-law に交換すべき Z がないばあい、ZD は第1の contre-partie である。MB が ZD を求めれば ZS は交換しうる女を奪われるがゆえに、MB は ZS にたいして position débitrice にある。“Ce statut de beau-frère potentiel constitue la base commune du mariage avunculaire et de l'assistance fournie par l'oncle au neveu au moment du mariage;”³²⁾

南アメリカとインド—Lévi-Strauss は Thurston や Frazer ほかによりながら—では cross-cousin marriage と ZD marriage が深く結びついている。選好の順位において、第1に cZD, 第2に FZD, それを欠くばあい第3に MBD, 最後に以上の3者を欠くときに yZD. “Le mariage des cousins croisés apparaît donc intercalé entre deux formes de mariage avunculaire”³³⁾ しかし Mysore においては ZD が cross-cousin よりも選好される。それは、MB と結婚した ZD は MBS からみれば FZD から MZ にその立場を変えていると考えられる。さらに南インドの tribe における FZD marriage と ZD marriage—Z を譲った男が交換に ZD を彼自身かあるいは S のために要求する—いゝかえれば両者は同じ原則によっている。“Le mariage avec la fille de la sœur du père, comme le mariage avec la fille de la sœur, représentent, tant au point de vue logique que psychologique, la réalisation la plus grossièrement concrète du principe de réciprocité.”³⁴⁾ Lévi-Strauss に とって、ZD marriage は cross-cousin marriage の代用であ

るか、あるいはそれに優先するか、あきらかではない。しかし、ZD marriage は、あきらかに、FZD marriage に結びつけられている。

5

1949—50年、南インド Tamil にフィールドを設定した Dumont のばあい、Kallar ほか他のカーストにおいては FZD marriage が優先し、ZD marriage は Tamil の他の upper caste と異なり禁止されている³⁵⁾。Tamil の Brahman を Gough によってみよう。H にたいする W の従属は male affine に asymmetrical の関係を、両親の asymmetrical の地位から cross-cousin も asymmetrical な関係にある。この cross-cousin と affine の地位の差のゆえに、Brahman の若者は FZD marriage よりも MBD marriage を選好する。MBD marriage は既存の asymmetrical relationship を強化するが、FZD marriage と eZD marriage はこれらの関係を転換させる。たゞし Kumbapettai の Brahman にあっては、MBD, FZD, ZD いずれの婚姻も全体のそれぞれ4%である。いずれかといえば、W にとって M-in-law は stranger よりも、FZ, MBW, MM である方が労少いからである。したがって、いずれのタイプの婚姻も女性から支持される。にもかゝらず Gough はさらにつゞける。"A girl's mother, moreover, is particularly likely to try by persuasion to bring about the marriage of her daughter to her own younger brother or brother's son and thus reinforce her ties with her own natal family. In this way, sister's daughter marriages and patrilateral cross-cousin marriages are sometimes arranged. In these unions, the asymmetrical relationships between male affines brought about by the most recent marriages tend to override those already existing before the marriage took place."³⁶⁾ 突然、MBD marriage が除外されて、ZD marriage と FZD marriage が結びつけられる。こゝでは asymmetrical relationship によって、Brahman と lower caste との比較—いゝかえるならば hypergamy への傾向を説明しようとする Gough の企図が混乱を招いている。

Gough の asymmetrical relationship は、Dumont にとって wife-givers と wife-takers との地位の差である。".....a difference of status coupled with matrilineal cross-cousin marriage..... But it appears logically impossible to couple, in a classificatory system, difference of status and uncle-niece marriage..... There seems to be only one possibility of conciliating uncle-niece marriage (together with the two forms of unilateral cross-cousin marriage) with the recognition of difference of status between wife-givers and wife-takers, and it is to renounce in essentials the classificatory spirit:..."³⁷⁾ いま Dumont の Gough 批判—"romantic and substantialist", あるいは tendency to hypergamy と tendency to alliance には立入らない。descent group theory と structural theory との対立—MB は F にとって WB であるか、あるいは F'affine であるか—はいかなるアプローチによって "supplement"³⁸⁾ されるか。いゝかえれば、MB/ZS の関係が consanguineal relative であるか、terminologically affinal のそれであるか、もし complementary

filiation であるとすれば, descent line にたいしていかなる意味で “complementary”³⁹⁾ であるか, は別の問題であるからである. Lévi-Strauss の “親族の単位” について, “Il semble que l'accord entre le modèle et la réalité soit assez satisfaisant”⁴⁰⁾ と “補完” されるのはグラフ理論によってである. 問題は ZD marriage と Dumont の wife-givers と wife-takers の地位の差とは, classificatory system において, logically impossible の結びつきであるかどうかである.

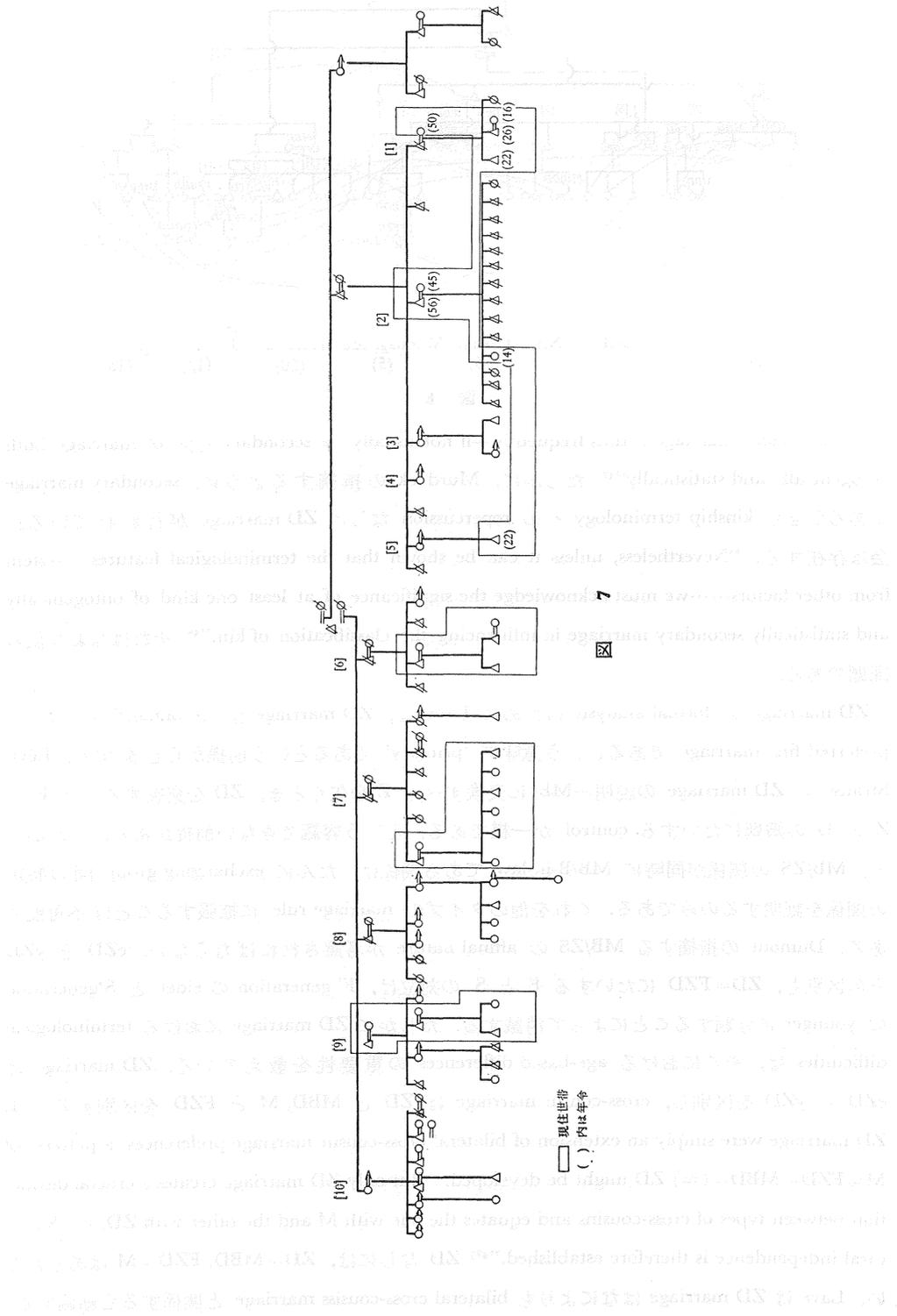
南インドの ZD marriage について最初の本格的な marriage statistics は McCormack によってえられた. Mysore の Morsralli と Huillipanhalli において, 518事例のうち, eZD と FBD (=classificatory Z) D, 9.8%, MBD と MFBS (=classificatory MB) D, 6.5%, FZD と FFBD (=classificatory FZ) D, 4.8%, そして ZHZ と 2.5%, WZ か BWZ との 3.7%の近親婚がみいだされる. いま ZD, FZD, ZHZ marriage を sister-exchange とすれば, “The figures are then 19% sister-exchange and 10% wife-giving marriages for our sample. These statistics suggest that if marriage rules do affect social stratification in the two village, the force would be against the formation of a social hierarchy between wife-receiving and wife-giving groups.”⁴¹⁾ Gough の “asymmetrical relationship” は, Morsralli においては reciprocal relationship にとって代わられる. “Cross-cousin and sister's daughter marriages unite relatives who are linked by equal and reciprocal ties, and the symmetry of their relationship is revealed in the use of a self-reciprocal kin term, mother's brother=sister's son=male cross-cousin=brother-in-law, when the relatives are of approximately equal age.”⁴²⁾ この reciprocity を S-in-law の相続という点からすれば, “Sister's daughter marriages and sister's husband's sister marriages confer reciprocal chances on the two brothers-in-law to inherit each other's property. In this respect father's sister's daughter marriage is like a lien which is satisfied in the next generation.”⁴³⁾ ここでふたたび McCormack によって, ZD marriage は FZD marriage と同じ function をもつものと解釈される.

ふたたび Dumont によれば, “…… the uncle-niece marriage is compatible with the common classificatory scheme, it simply brings about basic equations: mother's brother=sister's son=……, i.e. the identification of three successive generations affines.”⁴⁴⁾ という意味で McCormack は “logical” であるだろう. “But statistics can only complete the study of rules, the study of the normative aspect (the two are confused), and one could have wished for some concrete genealogical examples. As far as the question of a possible hierarchy between the group taking and giving women is concerned, the logical relation between reciprocal and unilateral forms of inter-marriage is not quite as McCormack poses it.”⁴⁵⁾ Dumont は McCormack の ZD marriage 9.8%のうちにはそれが同時に MBD marriage をふくむ率であるという想定を註記する. McCormack は Dumont の bias を指摘する. “A variation possible in South India is that, with sister's daughter marriage, MB and ZS may become brother-in-law, a fact which would tend to support Dumont's contention that affinity is to be emphasized. Contrary to structural expectations, however, MB/ZS marriages can be unpleasant.”⁴⁶⁾ ZD marriage の事例にもどろう.

Hullenhalli の Lingayat の家族は図7にみられるとおりである。図7の〔2〕Chickka-puttaiah は現在56才、本村の古くからの temple priest である(写2)。村の取極めにしたがい、村有財産 24 acres の耕地を、〔6〕、〔7〕、〔9〕の家族と共同耕作する。この収穫は売却、分配できないのが原則であって、事実上寺院の財産であり、これを管理するものの世襲の権利となっている。したがって、耕作地は分割も許されないが、現在、〔2〕の家族と、〔2〕の当主の叔父にあたる〔9〕ならびに〔6〕、〔7〕の家族と、12 acres ずつを耕作する。ただし、この〔9〕の家族は他村に 8 acres の耕作地をもち、あわせて 20 acres を耕作している。いま〔2〕の家族についてみれば、Chickka-puttaiah は MBD を妻とし、その両親も MBD 婚、〔1〕の長兄にとっては FFBDD にあたる50才の寡婦とその長男(26才)とその FFBDDDD にあたる16才の妻、ならびに未婚の22才の弟と同居し、自身の子供は11人の男子と3人の女子を生んだが、現在14才の娘1人をのぞいて、他はすべて出生後3日から3ヶ月の間に死去、この14才の娘は、〔1〕の寡婦の FBS と結婚した〔5〕の末妹の22才の長男(現在 Bangalore の Genearl Training Center に勤務のため同居)と、婚約中—すなわちこの長男からすれば MBD 婚—計8人の家族である。未婚の男子1人を除けば、〔2〕の家族の婚姻はすべて近親婚である。

図7にみられるように、Chickka-puttaiah の祖父は2人の妻をもっていたために、かなり特殊な複雑さを増すが、いま図7のなかにふくまれる近親婚のみを抽出すれば図8のごとくである。こゝには、〔1〕の FFBDD 婚、〔2〕の MBD=FMBSD 婚、〔3〕の〔2〕の WB への婚出、いかえれば、FZD=FFZSD、〔4〕の〔10〕の2男への婚出、〔5〕の〔1〕の WFBS への婚出、〔6〕の妻と〔9〕の妻、したがって〔10〕との関係—このばあい〔10〕の夫は父方の第4イトコに該当するというが系譜的には確定しえない—さらに〔6〕の長男への〔1〕の妻の FBD の婚入、それは〔7〕との関係において FBDD を妻とする、孫への〔10〕の娘、すなわち FFZD=FMFBD 婚、〔7〕への〔3〕の娘の婚入、〔8〕の妻の弟の ZD 婚、〔9〕と〔10〕の婚出先とにおける yZD と MBD 婚—これらすべて合計17例の近親婚をみいだすことができる。これら17事例はつぎのとおりである、MBD, 6 (うち MBD=FMBSD 1例をふくむ) と MFBS (=classificatory MB, 以下同様) D 1, 計 MBD 婚 7 例, ZD 2 (うち yZD 1をふくむ) と FBD (=Z) D 4, 計 ZD 婚 6 例, FZD=FFZSD 1, FFBD (=FZ) D 1, 計 FZD 婚 2 例, その他 FFZD 婚 1, FFBDDDD 婚 1 の 2 例である。少数例ではあるが、こゝではあきらかに ZD 婚は FZD 婚よりも MBD 婚と結びついている。

ZD marriage は MBD marriage にか、あるいは FZD marriage にか、または bilateral cross-cousin marriage に結びつくか。ZD marriage は secondary marriage か、あるいは primary marriage かの問題にたちかえらねばならない。Shapiro は secondary marriage であると考



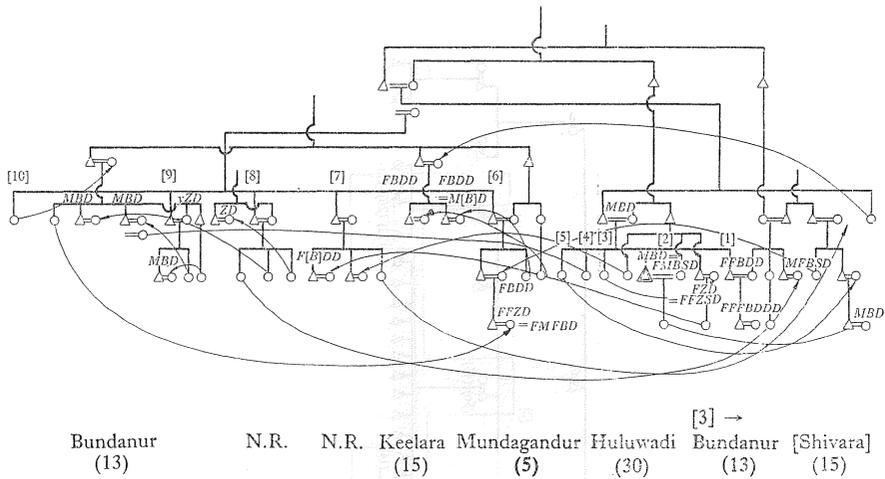


図 8

る。“Avuncular marriage is thus frequently—if not usually—a secondary type of marriage both ontogenically and statistically”⁴⁷⁾ たしかに、Murdock の指摘するように、secondary marriage であるかぎり kinship terminology への repercussion なしに ZD marriage が行われている社会は存在する。“Nevertheless, unless it can be shown that the terminological features……stem from other factors……we must acknowledge the significance of at least one kind of ontogenically and statistically secondary marriage in influencing the classification of kin.”⁴⁸⁾ それはなお今後の課題である。

ZD marriage の formal analysis のために Lave は、ZD marriage が ‘secondary’ ではなく、preferred first marriage であるという意味で ‘primary’ であるという前提から出発する。Lévi-Strauss の ZD marriage の説明—MB に交換すべき Z を欠くとき、ZD を交換する—は F の Z と D の婚姻にたいする control が一様である、という容認できない前提がある。したがって、MB/ZS の関係が同時に MB/B-in-law である関係は、たんに exchanging group 間の特定の関係を証明するのみである。これを他のタイプの marriage rule に拡張することは不可能である。Dumout の指摘する MB/ZS の affinal nature が考慮されねばならない。eZD と yZD との区別も、ZD=FZD にたいする F と S の対立は、F’ generation の elder と S’ generation の younger に分割することによって消滅する。たしかに ZD marriage における terminological difficulties は、そこにおける age-based differences の重要性を教えている。ZD marriage は eZD と yZD を区別し、cross-cousin marriage は ZD と MBD, M と FZD を区別する。“If ZD marriage were simply an extension of bilateral cross-cousin marriage preferences, a pattern of $M \ni FZD = MBD = (\ni) ZD$ might be developed. But only ZD marriage creates a crucial distinction between types of cross-cousins and equates the one with M and the other with ZD.……Structural independence is therefore established.”⁴⁹⁾ ZD なしには、ZD=MBD, FZD=M はありえない。Lave は ZD marriage はなによりも bilateral cross-cousin marriage と関係すると結論する。

Lave の “formal analysis” はなにをわれわれに教えるだろうか。Lévi-Strauss の MB/ZS の creditor-debter relationship にたいして、突然、Leach⁵⁰⁾ を引用して、“the possibility of immediate counter-prestations of goods and services” を無視している、と批判する。Lévi-Strauss の “交換” はこの文脈に関係しない。“A Formal Analysis of Preferential Marriage with the Sister's Daughter” が Needham⁵¹⁾ の “The Formal Analysis of Prescriptive Patrilineal Cross-cousin Marriage” に対置させたのかどうかはあきらではないが、Lave の “preferential marriage” は “prescriptive marriage” と同意語に過ぎない。preferential か prescriptive かの formal model たりうるには、たとえば “.....the estimates of cross-cousin marriage rates...are sufficiently reliable to permit theoretical inferences about the variability of prescriptive marriage norms in a social system.....”⁵²⁾ という結論に導かれねばならない。なぜならば “...even a preferential system is prescriptive at the level of the model, while even a prescriptive system cannot but be preferential at the level of the reality”⁵³⁾ であるからである。Lave の ZD marriage の formal model は問題の整理にはなりえても、“a guide for ethnographic enquiry” たりうるものではない。

7

Mysore では ZD marriage と bilateral cross-cousin marriage がおこなわれている。ZD marriage の解明には、2つの道が残されている。第1に、もっとも大胆に、いまみいだされる marriage statistics のなかで、ZD marriage が数世代にわたって継起したばあい、いゝかえるならば、すべての classificatory relationship を除外して同一人が ZD=MBD=FZSD=FMBSO=...である事例が全婚姻総数のなかでどれほどの率を占めるか、である。この仮定についてはすでにその一部が Moore によって指摘されたところのものである。Moore は oblique marriage を “a kind of sexual succession” であり older partner にとって “secondary marriage” であることを前提とする。asymmetrical cross-cousin marriage も oblique marriage もともに B/Z の関係は依存し、ともに affinal alliance を繰返して行なうものである。両者の時間的順序が問題である。“The coincidence of oblique and asymmetrical cousin marriages does not prove a connection, but the circumstances make it seem a strong possibility, and in a few cases there is evidence that suggests a sequence:.....to consider only the oblique marriages as possible antecedents of the cousin marriage.”⁵⁴⁾ oblique と asymmetrical cousin marriage の問題は the patterned succession of the generations の問題である。

この率がいかなる意味をもつかについては、第2、eZD と yZD の問題と関係する。elder と younger の区別は—Lévi-Strauss が Nambikwara でみいだし⁵⁵⁾、重視し⁵⁶⁾、Karve が南インドでその “principle” の説明に失敗し⁵⁷⁾、Dumont が注目し⁵⁸⁾、その重要性を強調し⁵⁹⁾ ている問題である。この問題は2つに分れる。i) 年齢は世代と区分されるほどに terminological scheme に影響を与える要因であるかどうか。この課題は Rose⁶⁰⁾ の業績にしめされるように、データ

収集について基本的な再検討を要請される。なぜならば、ii) 南インドにおける lower caste のばあい、yZD marriage はかならずしも taboo ではないからである。ZD marriage のなかで、eZD と yZD のそれぞれの率が問題となる。

これらの 1) 同一人が ZD=MBD=FZSD=FMBSD=……の率と、2) eZD と yZD marriage のそれぞれの率のもつ意味をみいだすためには、たとえば Gilbert and Hammel⁶¹⁾ の企てた cousin marriage の simulation model を ZD marriage に発展させ、Goldberg⁶²⁾ のいう “spouse pool” をあきらかにすることが必要である。Sanskritic Hinduism のもとにおける南インドの ZD marriage は、また Coorgs⁶³⁾ や Bhumia あるいは Gond⁶⁴⁾ とは無縁ではないからである。さらにまた、Mysore, Madras ほかにインド南部諸州における初婚年令が、北部諸州に比して、constant に高い⁶⁵⁾理由の 1 つは、ZD marriage の慣行と結びつけて考察できるからである。

註

- 1) Srinivas, M.N., “The Social System of a Mysore Village,” in *Village India*, ed. M. Marriot, 1955, pp. 1-36.
- 2) I, 「Bengalese 村落における cousin marriage」
- 3) Srinivas, M.N., *Marriage and Family in Mysore*, 1942.
- 4) *Ibid.*, p. 39.
- 5) *Ibid.*, p. 56.
- 6) Ghurye, G.S., “Dual Organization in India,” *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 53 (1923), pp. 79-91.
- 7) Karve, I., *Kinship Organization in India*, 1953.
- 8) *Ibid.*, p. 187.
- 9) Dumont, L., “Kinship,” *Contributions to Indian Sociology*, 1 (1957), p. 59.
- 10) Karve, *op. cit.*, p. 229.
- 11) Gangopadhyay, B., *Marriage Regulations among certain Castes of Bengal*, 1964.
- 12) Srinivas, M.N., “Introduction,” in *India's Villages*, ed. M.N. Srinivas, 1955, p. 12.
- 13) Gould, H.A., “The Micro-demography of Marriages in North Indian Area,” *Southwestern Journal of Anthropology*, 16 (1960), pp. 476-491.
- 14) Gough, E.K., “Caste in a Tanjor Village,” in *Aspects of Caste in South India, Ceylon and North-West Pakistan*, ed. E.R. Leach, 1960, pp. 11-60.
- 15) Klass, M., “Marriage Rules in Bengal,” *American Anthropologist*, 68 (1966), pp. 951-70.
- 16) *Ibid.*, p. 957.
- 17) Dumont, *op. cit.*, p. 46.
- 18) Rivers, W.H.R., “The Marriage of Cousins in India,” *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain & Ireland*, 1907, p. 615.
- 19) *Ibid.*, p. 616.
- 20) Richards, F.J., “Cross Cousin Marriage in South India,” *Man*, 1914, 97.
- 21) Hartland, E.S., *Matrilineal Kinship, and the Questions of its Priority*, *Memoirs of the American Anthropological Association*, No. 4 (1917), p. 22.
- 22) Tylor, E.B., “On a Method of Investigating the Development of Institutions; Applied to Laws of Marriage and Descent,” *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 18 (1889), pp. 245-72.
- 23) Lowie, R.H., “The Matrilineal Complex,” *University of California Publications in American Archaeology and Ethnology*, 16 (1919), p. 42.
- 24) Lévi-Strauss, C., *Anthropologie structurale*, 1958, p. 48.
- 25) Naroll, R., “Two Solutions to Galton's Problem,” *Philosophy of Science*, 28 (1961), pp. 15-39.—, “Galton's Problem; The Logic of Cross-cultural Research,” *Social Research*, 32 (1965), pp. 428-51.
- 26) Radcliffe-Brown, A.R., “The Mother's Brother in South Africa,” in *Structure and Function in*

- Primitive Society by A.R. Radcliffe-Brown, 1952, pp. 27-28.
- 27) Buchler, I.R. and H.A. Selby, Kinship and Social Organization, 1968, p. 31.
 - 28) Lévi-Strauss, op. cit., pp. 56-57.
 - 29) Lévi-Strauss, C., Les structures élémentaires de la parenté, nouv. éd., 1967, p. 498.
 - 30) Lévi-Strauss, C., La vie familiale et sociale des Indiens Nambikwara, Journal de la Société des Américanistes, 37, 1948, p. 83.
 - 31) Ibid., p. 83, note (1).
 - 32) Lévi-Strauss, 1967, p. 501.
 - 33) Ibid., p. 496.
 - 34) Ibid., p. 516-17.
 - 35) Dumont, L., Hierarehy and Marriage Alliance in South Indian Kinship, Occasional Papers of the Royal Anthropological Institute, No. 12, 1957, pp. 13-14. —, Une sous-caste de l'Inde du sud, 1957, p. 186.
 - 36) Gough, E.K., "Brahman Kinship in a Tamil Village", American Anthropologist, 58 (1956), p. 844.
 - 37) Dumont, L., "Marriage in India, The Present State of the Question", Contributions to Indian Sociology, V (1961), p. 90.
 - 38) Dumont, L., "Structural Theory and Descent Group Theory in South India", Man, 1960, 125.
 - 39) Schneider, D.M., "Some Muddles in the Models: or, How the System really Works", in The Relevance of Models for Social Anthropology, ed. M. Banton, 1965, p. 53.
 - 40) Flament, C., Théorie des graphes et structures sociales, 1965, p. 160.
 - 41) McCormack, W., "Sister's Daughter Marriage in a Mysore Village", Man in India, 38 (1958), p. 38.
 - 42) Ibid., p. 45.
 - 43) Ibid., p. 48.
 - 44) Dumont, 1961, p. 90.
 - 45) Ibid., p. 94.
 - 46) McCormack, W., "Review" of "Une sous-caste d'Inde du sud" and "Marriage Alliance in South Indian Kinship", Current Anthropology, 7 (1966), p. 339.
 - 47) Shapiro, W., "Secondary Unions and Kinship Terminology: The Case of Avuncular Marriage", Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde, 122 (1966), p. 86.
 - 48) Ibid., p. 87.
 - 49) Lave, J.C., "A Formal Analysis of Preferential Marriage with the Sister's Daughter", Man, 1 (1966), p. 196.
 - 50) Leach, E.R., "The Structural Implications of Matrilateral Cross-Cousin Marriage", Journal of the Royal Anthropological Institute, 81 (1951), pp. 23-55.
 - 51) Needham, R., "The Formal Analysis of Prescriptive Patrilineal Cross-Cousin Marriage", South-western Journal of Anthropology, 14 (1958), pp. 199-219.
 - 52) Kunstadter, P., R. Buhler, F.F. Stephan and C.F. Westoff., "Demographic Variability and Preferential Marriage Patterns", American Journal of Physical Anthropology, 21 (1963), p. 515.
 - 53) Lévi-Strauss, C., "The Future of Kinship Studies", Proceedings of Royal Anthropological Institute, 1968, p. 17.
 - 54) Moore, S.F., "Oblique and Asymmetrical Cross-Cousin Marriage and Crow-Omaha Terminology", American Anthropologist, 65 (1963), p. 304.
 - 55) Lévi-Strauss, 1948, p. 25.
 - 56) Lévi-Strauss, 1967, p. 499.
 - 57) Karve, op. cit., pp. 223-25.
 - 58) Dumont, L., "The Dravidian Kinship Terminology as an Expression of Marriage", Man, 1953, 54.
 - 59) Dumont, 1957 ("Kinship"), pp. 61-62.
 - 60) Rose, F.G.G., Classification of Kin, Age Structure, and Marriage amongst the Groote Eylandt Aborigines, 1960.
 - 61) Gilbert, J.P. and E.A. Hammel, "Computer Simulation and Analysis of Problems in Kinship and Social Structure", American Anthropologist, 68 (1966), pp. 71-93.
 - 62) Goldberg, H., "FBD marriage and Demography among Tripolitanian Jews in Israel", South-western Journal of Anthropology, 23 (1967), pp. 176-91.
 - 63) Srinivas, M.N., Religion and Society among the Coorgs of South India, 1952.
 - 64) Fuchs, S., The Gond and Bhumia of Eastern Mandla, 1960.

65) Agarwala, S.N., Age at Marriage in India, 1962.

本調査にあたって、Bombay 大学 Dr. D. Narain, 在 Bombay 狩野正次御夫妻、調査実施に、在 Mandya 日印農場泰永弘場長御夫妻はじめ皆様、通訳 Mr. A.S. Iyer に深甚の謝意を表したい。とくに Mysore 南下への、狩野御夫妻との Deccan 高原露営の旅は、忘れえない旅の1つである。調査費用の一部を大阪大学インド、東南アジア研究センターの補助によっている。付記して御礼申上げたい。

66) Kinnear, M. N., Religion and Society among the Coorgs of South India, 1957. *Journal of Anthropology*, 23 (1957), pp. 175-211.

67) Goldberg, H., "EBI) marriage and Demography among Tripolitanian Jews in Israel." *American Anthropologist*, 68 (1966), pp. 71-82.

68) Gilbert, J. D. and E. A. Hammer, "Computer Simulation and Analysis of Problems in Kinship." *American Anthropologist*, 67 (1965), pp. 177-187.

69) Moore, S. E., "Oblique and Asymmetrical Cross-Cousin Marriage and Cross-Cousin Marriage." *American Anthropologist*, 67 (1965), p. 177.

70) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

71) Kinnear, M. N., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

72) Kinnear, M. N., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

73) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

74) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

75) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

76) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

77) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

78) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

79) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

80) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

81) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

82) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

83) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

84) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

85) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

86) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

87) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

88) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

89) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

90) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

91) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

92) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

93) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

94) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

95) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

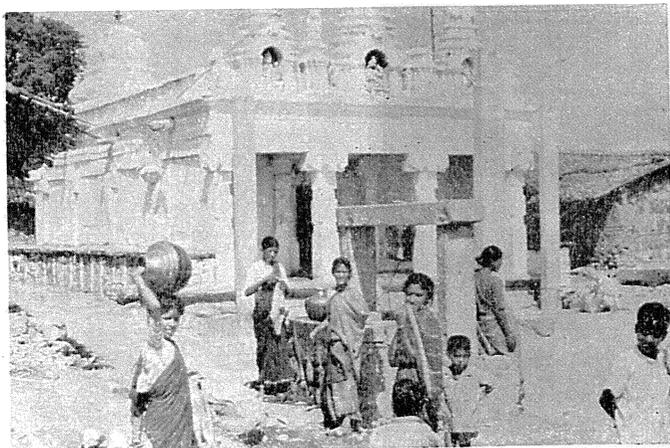
96) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

97) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

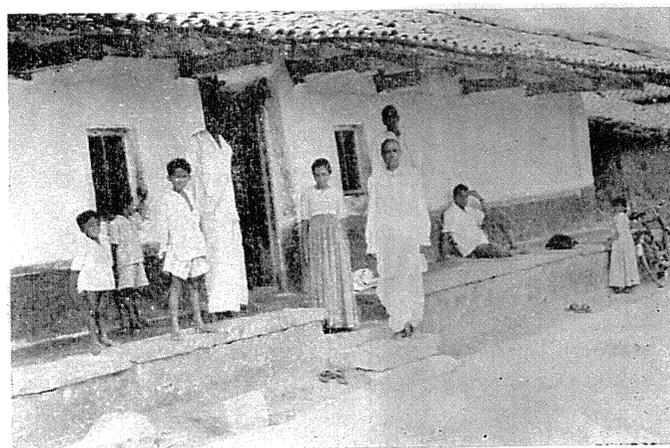
98) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

99) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.

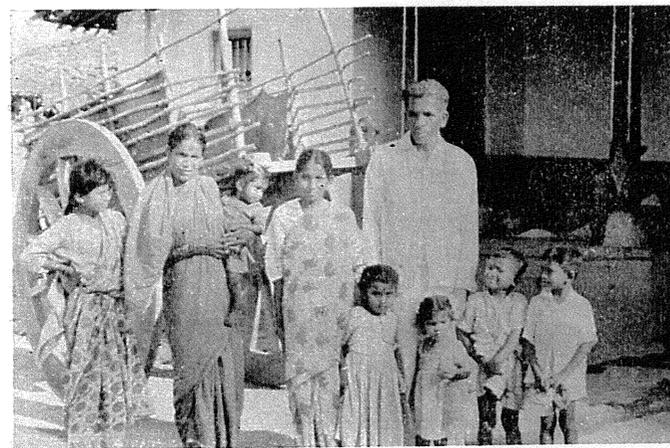
100) Lévy-Strauss, C., "The Binary of Kinship Studies," *Proceedings of Royal Anthropological Society*, 1968, p. 17.



1 村の中心



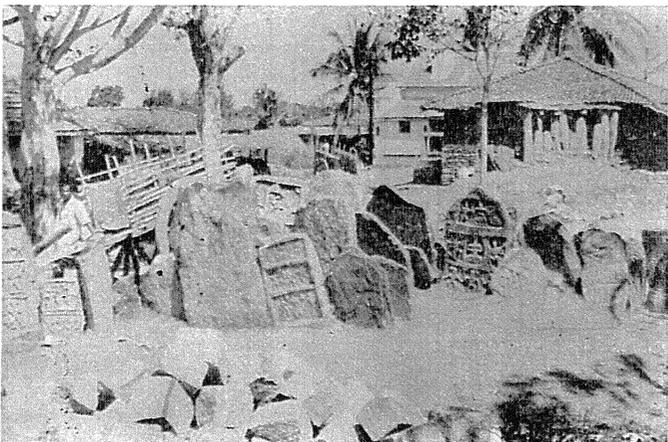
2 Lingayat



3 Vokkaliga



4 年雇労働者



5 広 場



6 サリーの洗濯

III Sister's Daughter Marriage in Canarese Village

Hullenahalli is one of the typical farm village of Mysore, which consists of about 140 families of several castes, that is, Lingayat, Vokkaliga and so on, and they are producing rice of 15–30 maunds per acre. Different from the surrounding villages, each caste is not divided into intermarry circles.

Either ZD marriage or cross-cousin marriage is observed in both Lingayat and Vokkaliga families. Concerning such marriage type in southern India, I. Karve has given an explanation to it through kinship terminology and difference in kinship organization between those in northern and southern India, but the explanation is unsuccessful. The question for ZD marriage lies in 1) whether it is immediate exchange of daughters and 2) to which it relates MBD marriage or FZD marriage? In case of Hullenahalli, MBD marriage are more often found than FZD when ZD marriage is observed.

It has been for long pointed out that ZD marriage has been practiced habitually, but only lately it was taken up with relation to MB/ZS. C. Lévi-Strauss points out that ZD marriage has close connection with FZD marriage through not only data of Nambikawra but various examples of southern India, and E.K. Gough's conclusion is alike on the data of Brahman in Tamil. Also W. McCormack who has first presented full-scale marriage statistics on ZD marriage in Mysore considers that ZD marriage is connected with FZD marriage in view of its function.

The particulars of 17 inbreeding cases in Lingayat are as follows; MBD 6, MFBS (=classificatory MB) D 1, resulting in MBD marriage 7 in total, and ZD 2, FBD (=Z) D 4, ZD marriage 6 in total, and FZD 1, FFBD (=FZ) D 1, FZD marriage 2 totally, and others 2. Viewed from the above, the following questions are supposed to be left for further consideration on marriage statistics of ZD marriage. 1) Which rate does such case come to as ZD marriage is repeated for generations in the way of direct exchange of daughters except classificatory relationship, in other word, the case that the sole one is at a time ZD, MBD, FZSD, FMBSD and so on? About part of this supposition, S.F. Moore has already suggested. 2) Classifying elder ZD and younger ZD in ZD marriage is essential for the problems in concern to be settled as L. Dumont pointed out, and in which ratio does actually eZD and yZD stand? After data relating to these two problems are collected and the result is compared with the simulation model of ZD marriage, we will be able to understand the meaning of "exchange" in the case of ZD marriage and its relation with cross-cousin marriage.

IV Andhra Pradesh のヒンドゥ村落

1

Vedullapalli は, Andhra Pradesh の Guntur District, Bapatla の郊外にある。Bapatla town は, '61年センサス³⁾によれば, 人口 33,668, Bapatla rural は 7,535 である。Bapatla rural は行政的に Bapatla East と West に分けられている。Bapatla West は 6つの hamlet²⁾に分れ, そのうち, 北をその hamlet の1つ, Kothapalem, 南を Kundaru, 西に Batapudi に囲まれ, Vedullapalli は, Bapatla town から西約5マイルに位置する村落である。村の北を South Central Railway が走り, 図1にみられるように, 中央を Guntur から Bapatla を経て, Chirala にいたるバス路線が鉄路と平行によぎっている。

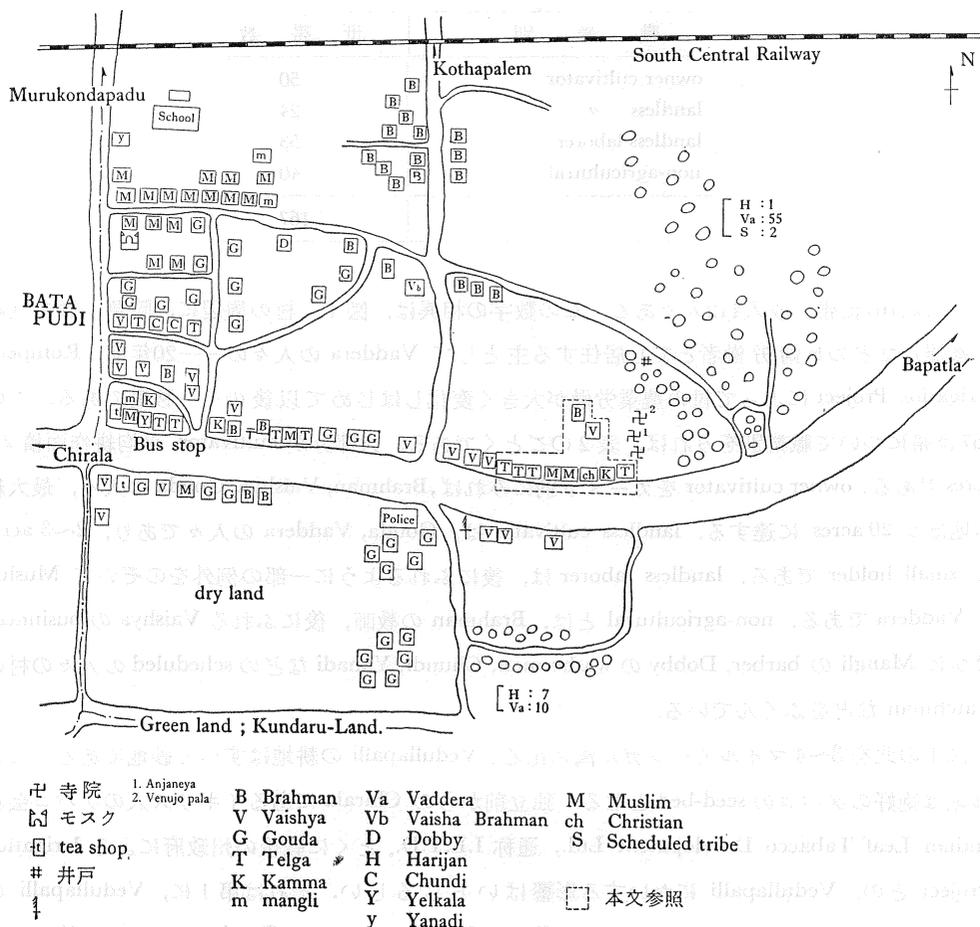


図 1

図1にみるように, 総家屋数191, うち2戸の tea-shop をのぞき, '67年8月現在, カースト別総世帯数は表1のごとく 189世帯である。'67年2月の Government Election Roll³⁾ によれ

表 1

カースト	世帯数	カースト	世帯数
Brahman	25	Dobby	1
Vaishya	17	Harijan	8
Gouda	28	Chundi	2
Telga	10	Yelkala	1
Kamma	3	Yanadi	1
Mangli	3	Scheduled tribe	2
Vaddera	65	Muslim	21
Vaishya Brahman	1	Christian	1
			189

表 2

職業別	世帯数
owner cultivator	50
landless "	24
landless laborer	53
non-agricultral	40
167	

ば、総数167世帯、成人412人である。この数字の相異は、図1、村の周辺に、除草、撒水（写3参照）などの日傭労働者として居住する主として Vaddera の人々の——20年前、Romperu Irrigation Project によって村の農業労働が大きく変化しはじめて以後の——移動である。この167世帯について職業別をみれば、表2のごとくである。大部分が cultivator、平均耕作面積 2.5 acres である。owner cultivator をカースト別にみれば、Brahman, Vaishya, Gouda の人々、最大耕作地は 20 acres に達する。landless cultivator は、Gouda, Vaddera の人々であり、2~3 acres の small holder である。landless laborer は、後にふれるように一部の例外をのぞいて Muslim と Vaddera である。non-agricultural とは、Brahman の教師、後にふれる Vaishya の business、ほかに Mangli の barber, Dobby の washerman, Chundi, Yanadi などの scheduled の人々の村の watchman などをふくんでいる。

図1の北を3~4マイルでベンガル湾に出る。Vedullapalli の耕地はすべて砂地である。この砂地は絶好のタバコの seed-bed となる。独立前からの Chirala にあるイギリス人のタバコ会社 Indian Leaf Tobacco Development Ltd., 通称 I.L.T.D., とくに戦後の州政府による Irrigation Project との、Vedullapalli にたいする影響はいちじるしい。それは第1に、Vedullapalli の cropping pattern を大きく変化させ、landless cultivator としての Gouda の人々の経済的上昇をもたらし、第2は、Vaishya の人々を中心とする群小のタバコ葉会社の設立、そして統合によって小商人を生みだしている。

Vedullapalli の耕作暦はおよそつぎのとおりである。ほゞ20年前までは wet の paddy と dry

の Ragi の耕作にとどまっていた。現在, paddy は 7 月から 12 月までと 1 月から 4 月までの 2 季作が, 村の内外の耕作地約 300 acres におこなわれている。この 1 月から 4 月までは水はない。acre 当り約 15 quintol の収穫, 1 quintol 約 Rs. 50, したがって acre 当り約 Rs. 750 の収入である。dry の耕作は, i) Ragi をはじめ, ii) ground nut, iii) cashew nut, iv) fodder crop, v) casurina (燃料), vi) vegetable, vii) flower, viii) タバコをふくむすべての nursery である。これらのうち, nursery と vegetable と Ragi は 2~3 ヶ月収穫による年 3 季の輪作がおこなわれてきた。しかし, 現在は Ragi や ground nut にかわって, vi) vegetable は, green chilly, bean, cucumber などすべて Madras あるいは Bombay まで出荷し, vii) flower は砂地にのみ育成可能な jasmin が Hyderabad に, 香水用のものは Vetapallem に出荷されている。これらは, ほぼ acre 当り Rs. 1000 を越える収入となる。viii) nursery のうち, タバコは苗床 8 月~11 月, 12 月を過ぎて paddy に代るが, 2 月出荷, 等級により acre 当り Rs. 2,000 から 4,000 になる。その結果, 食料としてたとえば red, green, black の gram など, すべてタバコに代えられている。この cash crop への転換は, またいうまでもなく food crop の価格を上昇させている。これらの cropping pattern の変化はますますはげしさをましている。

このタバコ葉の集荷をめぐって, Vaishya の人々を中心に, Golden Tobacco Co., (後に All Indian Tobacco Co., に吸収合併), National Tobacco Co., (外国人資本) などの下請け企業が設立, そこに多数の女子労働者が雇われ, インド農村としては珍しく新しい動向に見舞われている。女子労働者はサリーを脱ぎ捨ててはいるが, Gouda 以下の下層の労働者世帯の生活は他に比して改善されつつある。商人として Vaishya は余剰の利益を貸家に投資し, 図 1 の寺院近く main road に沿った点線の部分はこれら Vaishya の人々の所有である(写 1)。他にも村内にいくつかの新家屋を建築し, 教師, 郵便局長など転勤するサラリーマン化した Brahman の人々に貸与する。Vaishya の人々の経済的上昇はいちじるしい。

にもかゝらず, Vedullapalli は, なお Boddupalli Family が優越する古典的 Brahman の村である。Brahman の表 1 の世帯数ではなく, 家族数 20 のうち, 半数の 9 家族は Boddupalli Family によってしめられている。Vedullapalli の, Vijawada を経て Calcutta にいたる東海岸一帯は, かつての独立運動の激しかった地域である。その伝統はいまも生きている。当時の指導者 Boddupalli Venukata Subbaiah Sarma は, 運動のため Mrs. Subbaiah とともに入獄数回におよび, その真偽はともかく 13c 以来の村の家族の details を保有し, Boddupalli Family ばかりでなく, ムスリムの志士 Shaik Nabisaheb(写 4)とともに, なお Vedullapalli の村全体の指導的位置にある。ただし, これら Boddupalli Family 間の関係は系譜的に確定することは困難である。このことは Vedullapalli の近傍でも同様である。たとえば, 約 16 マイル距てた Mentanavari は, 本村が Brahman 10 世帯, Kshatriya 73, Vaishya 10 と backward caste 約 250 世帯からなるが, Brahman 10 世帯はすべて Machiraju Family であり, そのうち約 50 acres の所有地をもつとくに M. L. A. Venkataraju が当時の指導者であり, 現在その長男 M. V. R. Krishn-

amraju が村の実権を握っている。6マイル距てた Karlapalem もまた同様である。約350世帯、20世帯の Brahman と Kshatriya 150世帯をのぞいて、Muslim 50, 残りは backward caste であるが、Brahman は Karlapalem Family 14, Brindavanam Family 4, Guntur Family 2, とくに Karlapalem Family がなお村を支配する。これらの40~50 acresを所有する地主層が国民会議派として独立運動の先鋒にたったのは、そう古いことではない。たまたま、Vedullapalli は海岸線近く、バス道路に面して、Romperu Irrigation Project によってタバコ葉栽培が Vaishya, Gouda の人々の経済的上昇による動揺を、村全体がうけているというにすぎない。

2

本稿は、Andhra-desa におけるこのように動揺する Vedullapalli を、前稿の III, Mysore における静止した村落 Hullenahalli と比較して、i) Vedullapalli の動態は村人の marriage circle にいかなる影響を与えたか、ii) Dravidian に共通とされる ZD marriage は、Andhra-desa における《Menarikam》、すなわち cross-cousin marriage とどのような関係にあるといえるか、を問題とする。

Andhra Pradesh の marriage statistics をとり扱った事例は、Hyderabad 近郊村 Shamirpet を調査した Dube⁴⁾ が数少ない1つである。しかし、Dube のばあい、ヒンドゥ 340 事例のうち 18%、ムスリム 40 事例のうち 19 事例が cousin marriage であったと報告されているにすぎない。その本格的な分析は、むしろ遺伝学者 Dronamraju⁵⁾ によって、はじめられている。海岸地帯、ヒンドゥの婚姻 2,177 事例のうち、7.2% が ZD 婚、16.6% が first cousin, 6.7% が remote relatives との結婚であり、もっとも高率は MBD, つぎに ZD, 第 3 に FZD 婚である。このように高率の近親婚は、Dronamraju によれば、Gotra がある種の近親婚を禁止し、endogamous である subcaste が多数の個人からなっているとすれば、その理由は lack of choice of partner に帰せらるべきでない。面接結果によれば、主として経済的ならびに社会的なつぎの理由からである。“…… (a) to keep the cultivable land in large sub-divisions for growing food crops such as rice, (b) parental influence, (c) mutual knowledge of families, (d) economic benefit, as the parents and grandparents of consanguineous spouses and their descendants can all live together in large families, pool their resources and share the expenditure, and (e) the extreme youth of the brides.”⁶⁾ さらにつづけて Dronamraju は、1910 年以前における近親婚 45.5% は、1951—60 年に 28.9% に減少した。その理由は初婚年令ならびに、教育程度の上昇という社会学的要因にあり、近親婚はいゝかえるならば “rural illiterate” にある、と結論する⁷⁾。

このように南インドに多い近親婚をカーストではなく、Dronamraju のように社会学的要因にもとめることはできる。しかし、こゝではさきにふれたように Vedullapalli におけるカーストと近親婚の関係をとりあげたい。Vedullapalli において総数 1,093 の婚姻事例を調査した。表 3 にしめされるように、Vaddera 以下の backward caste の人々は、調査期間中大部分のものは

表 3

カースト別	婚姻事例数	近親婚数	率	村内婚数
Brahman	487	110	22.7%	5
Boddupalli Family	276	54	19.6	—
other Family	211	56	26.5	5
Vaishya	198	32	16.2	14
Gouda	215	64	29.8	7
Vaddera	95	25	26.3	—
Kamma	52	11	21.2	1
Vaishya-Brahman	12	2	16.7	—
小 計	1,059	244	23.1	
Muslim	34	15	44.1	8
計	1,093	259	23.7	35

村外に農業労働者として出掛けており、面接不能であった。このことはムスリムの大部分について同様である。本稿は Brahman, Vaishya, Gouda の人々の分析を中心とする。

表3から、まず第1に村内婚（村内婚のばあい、婚入のみを1と数える）の事例がきわめて少く、総数35にとどまっている。通婚の範囲については、のちにふれるが、この村内婚の少ないことは Vedullapalli のしめる地理的位置、Bapatla West のなかにあつて近接して他村落に囲まれていることによつていふ。いゝかえるならば、Vedullapalli においては村内婚をとりあげる意味はないといつていゝ。しかし、このような村内婚も、ことわるまでもなく近親婚との関係において考察されなければならない。近親婚の事例は、総数259、全体の23.7%、かなりの高率である。Kamma, Vaishya-Brahman については事例数が少なく、ムスリムについては、本村のムスリムに多い日傭労働者ではなく、特殊なききにふれた Shaik Family をのみをとりあげているために、こゝにおけるムスリムの近親婚の高率は特例であり、これらの事例をいま問題としない。残りのカースト別について、近親婚のもっとも高率なカーストは、Gouda の29.8%、ついで Vaddera の26.3%、Brahman 22.7%、もっとも少いのは Vaishya の16.2%である。ヒンドゥ全体として、近親婚23.1%とすれば、Vaishya のばあい、他に比してかなりの低率であるといえる。

いま Brahman の近親婚22.7%を、Boddupalli Family とその他の家族にわけると、Boddupalli のばあい近親婚19.6%、その他の Brahman は26.5%である。さきの村内婚の事例についても、少数例ではあるが Brahman 5事例のすべては Boddupalli Family ではなく、その他の Brahman である。Brahman の家族、20家族のうち、9家族が Boddupalli, Gotra はすべて Harithasa である。その他の Brahman は、Isukapalli Family が2、Gotra は Mitreya、そして Swurna 2, Ankaraja 1, Pannale 1 の4家族の Gotra は Koundinya、さらに Guntur 1, Mylavarapu 1 の2家族の Gotra は Bharadwata、ほかに Sreeramula 1, Gotra, Gouthama, Goparaju 1, Gotra, Sandilya, Nayulapalli 1, Gotra, Atreya、計11家族である。これらの Boddu-

palli Family とその他の Brahman との間には、少なくとも近親婚の率、村内婚について1つの差異がある。

このように、Vedullapalli における近親婚の率は、カースト別に、高率の順にすれば、Gouda, Boddupalli Family 以外の Brahman, Vaddera, Boddupalli Family, Vaishya である。たしかに近親婚の率は、Dronamraju の指摘するように、全体として“rural illiterate”に関係するだろう。Vedullapalli における literate の率は、ほゞ男27%, 女9%である。しかし、このカースト別の literate の率はあきらかではない。これらの近親婚のカースト別の率の差は、なにを意味するか、が問題である。

3

総数 1,093 の婚姻事例のうち 685 事例 (62.7%) について婚出入の地区を確定しえた。Brahman, Vaishya, Gouda の 3 カーストについて、婚出入の地区と Vedullapalli の距離をみれば、表 4 のごとくである。村から 20 マイル以内では Vaishya と Gouda の通婚が多く、40 マ

表 4

カースト	～20マイル %	21～40 %	41～60 %	61～ %	小計 %	不明	計
Brahman	23.4 (73)	34.9(109)	18.6 (58)	23.1 (72)	100.0(312)	(175)	487
Boddupalli	21.9(39)	48.3(86)	9.0(16)	20.8(37)	100.0(178)	(98)	276
その他	25.4(34)	17.2(23)	31.3(42)	26.1(35)	100.0(134)	(97)	211
Vaishya	64.3 (99)	21.4 (33)	9.7 (15)	4.5 (7)	100.0(154)	(44)	198
Gouda	62.5 (75)	17.5 (21)	15.8 (19)	4.2 (5)	100.0(120)	(95)	215
小計	42.2(247)	27.8(163)	15.7 (92)	14.3 (84)	100.0(586)	(314)	900
その他の caste, Muslim をふくむ	(51)	(12)	(24)	(12)	(99)	(94)	193
計	43.5(298)	25.5(175)	16.9(116)	14.0 (96)	100.0(685)	(408)	1,093

イルまでは Brahman, そのうちとくに Boddupalli Family, 40～60 マイルの地区ではとくに Boddupalli 以外の Brahman, 61 マイル以上ではすべての Brahman の通婚が多い。具体的にいえば、Vaishya と Gouda の 60% 余のものは 20 マイル以内、すなわち Bapatla taluka 内で通婚する。21～40 マイルの Boddupalli Family の通婚は、Tenali, (Vedullapalli から Tenali town までの距離 28 マイル, 以下同様), Guntur (34), Ongole (35) 各 taluka との通婚が多く、その他の Brahman のばあい Repalle (46) taluka が多い。たゞし、Vaishya のばあい Ongole taluka との通婚が、その職業からかなり高率である。61 マイル以上、いずれの Brahman も通婚しているのは、Guntur District 外、そのうち Boddupalli Family における Nellore との通婚 10 例をのぞけば、Vijayawada, Hyderabad などの都市への婚出である。Vaishya (7 例), Gouda (1 例) の少数の District 外との通婚は、いずれもこの Vijawada との通婚の事例である。

いまこれらの通婚の地域をカースト別にみれば、図2、3、4のごとくである。ただし District 外との通婚の一部を省略した。

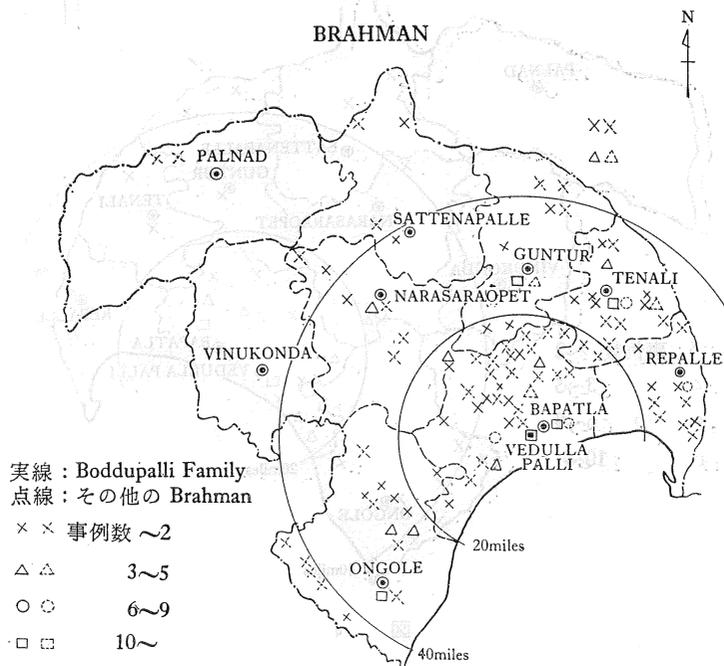


図 2

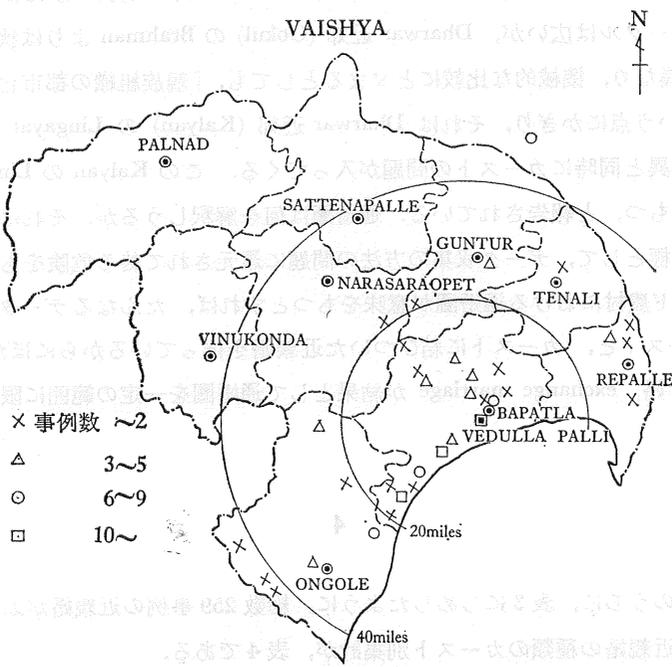


図 3

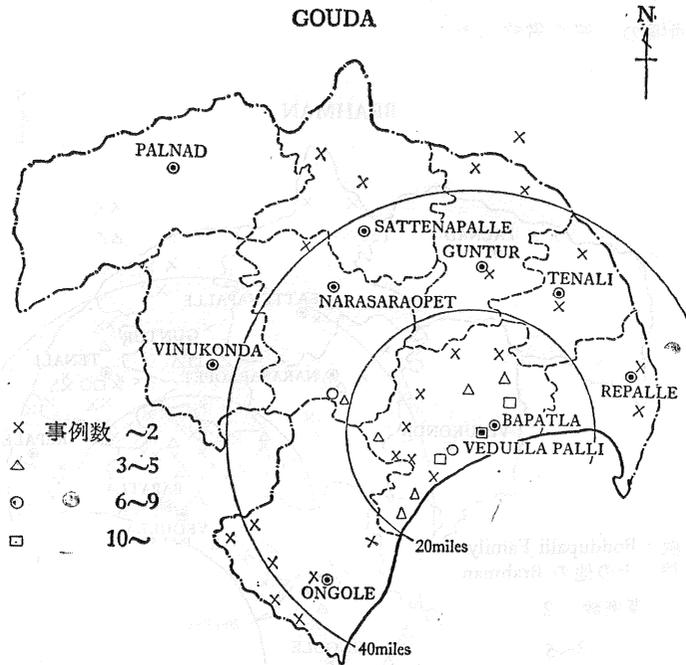


図 4

この Vedullapalli の通婚を Ishwaran⁹⁾ のデータとの比較を考えれば、Vedullapalli 全体として村内 5.1%, taluka 内 40.1%, district 内 46.0%, district 外 8.8%, したがって、Shivapur よりは通婚のサークルは広いが、Dharwar 近郊 (Gokul) の Brahman よりは狭い、といえるだろう。State も異なり、機械的な比較にとゞまるとしても、「親族組織の都市化の影響による変化の程度⁹⁾」という点にかぎり、それは Dharwar 近郊 (Kalyan) の Lingayat に該当する。こゝには地域の差異と同時にカーストの問題が入ってくる。この Kalyan の Lingayat は 30% を越える近親婚をもつ、と報告されている。通婚圏は何を解釈しうるか。それは時期的変動をとらえる 1 つの指標として、データ収集の方法の問題に還元されて終る危険をもつことは、別に触れた¹⁰⁾。インド農村における通婚圏が意味をもつとすれば、たんなるデータの不足ではなく、それがカーストと、カーストに結びついた近親婚を伴っているからにはほかならない。ZD 婚, cross-cousin 婚, exchange marriage が結果として通婚圏を一定の範囲に限定するからである。

4

これらの通婚のうちに、表 3 にしめしたように、総数 259 事例の近親婚がふくまれている。この 259 事例の近親婚の種類のカースト別集計が、表 4 である。

259 事例の近親婚は、さきにふれたように全体の 23.7% にすぎない。いま近親婚の種類をみ

表 5

カースト 近親婚	Brahman			Vaishya	Gouda	Vadd- era	Kamma	Vaishya -Brahman	t	Muslim	T	%
	B _B	B ₀	t									
ZD	17	13	30	6	7	8	4	—	55	—	55	21.2
MBD	17	9	26	15	19	9	4	—	73	2	75	37.8
FZD	5	4	9	—	11	1	1	1	23	—	23	
t	22	13	35	15	30	10	5	1	96	2	98	
MZD	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	1	1.0
FBD	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	
t	—	—	—	—	—	1	—	—	1	1	2	
計	22	13	35	15	30	11	5	1	97	3	100	38.8
FFBD	—	1	1	—	—	—	—	—	1	—	1	15.4
FMBD	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	1	
MFBD	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	1	
MMZD	—	1	1	—	—	—	—	—	1	—	1	
MMBD	—	1	1	—	—	—	—	—	1	—	1	
MBSD	3	1	4	—	1	—	—	—	5	—	5	
FZSD	1	1	2	1	1	4	—	—	8	1	9	
FBDD	—	4	4	2	4	—	—	—	10	1	11	
MZDD	—	2	2	3	3	—	—	—	8	1	9	
FZDD	1	—	1	—	—	—	—	—	1	—	1	
t	5	11	16	6	10	5	—	—	37	3	40	
FFZSD	1	2	3	—	—	—	—	—	3	—	3	
FMBSD	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	1	
FFBDD	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	
FMZDD	1	—	1	1	—	—	—	—	2	—	2	
FFZDD	—	1	1	—	—	—	—	—	1	—	1	
MFBSD	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	
MMZSD	1	3	4	—	3	—	—	—	7	—	7	
MMZDD	—	1	1	—	—	—	—	—	1	—	1	
t	3	7	10	1	3	—	1	—	15	2	17	
その他	7	12	19	4	14	1	1	1	40	7	47	18.1
T	54	56	110	32	64	25	11	2	244	15	259	100.0

備考：ZDにはMB, MBDにはFZS, FZDにはMBS, をふくんでいる。同様に, 第1イトコ違いはFBSS=FFBD, MZDS=MMZD, FFZS=MBSD, MFBS=FBDD, MMZS=MZDDとおきかえ, 第2イトコについても同じく, FMBSS=FFZSD, MFBS=FFBDD, MMZSS=FMZDD, FMZDS=MMZSDとおきかえている。

るために, 便宜上, 259を100とすれば, ZD婚21.2%, cross-cousin marriage 37.8%, うちMBD婚28.9%, FZD婚8.9%, 第1イトコ違い1st cousin once-removed婚15.4%, 第2イトコ婚6.5%, その他18.1%, ムスリムのparallel cousin marriage 0.8%である。表4の数字はカースト別に少数ではあるが, ZD婚はBrahmanに多く, それもBoddupalli Familyに多いことがうかがわれる。cross-cousin marriageもまた同様にBaddupalli Familyに多くみられるが,

Vaishya と Gouda についてはいずれも事例数が少なく、その少数例のうちでは Vaishya も Gouda も cross-cousin marriage が多い。しかしこの cross-cousin marriage は、表 4 にみられるように大部分が MBD 婚であって、cross-cousin marriage のうち MBD 婚の多いのは Boddupalli Family と Vaishya であり、Gouda は他のカーストに比して FZD 婚が多い。それにたいして、第 1 イトコ違い婚と第 2 イトコ婚の多くみられるのは、Boddupalli Family 以外の Brahman である。「その他」の近親婚 47 事例については、特記することはないが、うち 5 例の sister exchange をふくんでおり、それらは Boddupalli Family 2, その他の Brahman 2, Vaishya Brahman 1 である。Brahman と Vaishya-Brahman の sister exchange のもつ意味が異なることは、いうまでもない。

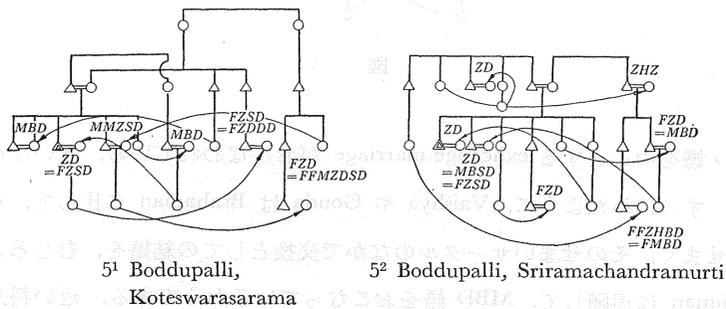
Vedullapalli の近親婚は、このように、sister exchange, ZD 婚, MBD 婚と伝統的な婚姻を踏襲している Boddupalli Family と、それについて同様に ZD, MBD 婚とともに第 1 イトコ違い, 第 2 イトコ婚に拡大しているその他の Brahman, さらに ZD 婚は少ないが, MBD, FZD 婚, すなわち Menarikam をおこなっている Vaishya, Gouda がつづくのである。いゝかえるならば、婚姻規制において、Brahman, なかでも Boddupalli Family がもっとも古典的な Brahman の伝統を保持し、その伝統的規制をその他の Brahman, Vaishya, Gouda が踏襲することによって、カーストの再結晶化あるいは再構成化とまでは指摘できないにしても、こゝにはあきらかにひろい意味の Sanskritization が働いているといえることができる。

ひろい意味の Sanskritization とは、Gouda における dowry の変化によくしめされている。Gouda の人々には、'65年まで dowry の習慣はみられなかったが、こゝ 1, 2 年来、村内のばあいほゞ最低 Rs. 1,000 の dowry が必要となった。それまではこゝ 10 数年、形式的に donation として Rs. 116 を持参させるのがとりきめであったが、Chirala における近時の dowry, 最低 Rs. 2,000 から最高 20,000 というごとき影響は、Gouda の学歴のある人々のばあい、1~2 acres の土地と最低 Rs. 1,116 の dowry となり、労働者のばあいにもこの最低限の dowry が必要となっている。Vaddera, Kamma の人々には、ほゞ 20 年前まで bride price がみられたが、たとえば現在、Vaddera の '66 年, bride price Rs. 1,500 に、dowry Rs. 300 という事例のように、dowry の慣習が確立しつつある。Brahman のばあい、dowry は最低 Rs. 5,000, 最高 Rs. 10,000, 平均 Rs. 3,000 であり、もし bridegroom が post-graduate ならば Rs. 20,000 となる。たゞし、Vaishya にあっては、商人として資本は子供にあると考えるとともに、その経済力から dowry たとえば Rs. 1,000 のばあい、Rs. 2,000 が bride 側に返される。このような bride price の消滅、それにかわる dowry の確立は、cropping pattern の変化の影響であるとともに、lower caste の Brahman 化であり、ひろい意味の Srinivas¹¹⁾ のいう Brahminization あるいは Sanskritization といえることができる。

5

このように、Vaishya や Gouda における婚姻規制をひろい意味の Sanskritization と考える

とすれば、Brahman における古典的な婚姻規制，cross-cousin 婚のうち理論的に FZD 婚の禁止，MBD 婚と ZD 婚との関係をどのように解釈するかがつぎの問題である。III, Mysore の論文にふれたように，原則として ZD 婚が世代を重ね繰返しておこなわれるとすれば， $ZD=MBD=FZSD=FMBSD=FFZSSD=FFMBSSD=……$ が成立する。ことわるまでもなく，こゝでは ZD 婚が direct exchange marriage であるという前提に立つ。



5¹ Boddupalli,
Koteswarasarama

5² Boddupalli, Sriramachandramurti

図 5

具体例をみよう。図5はいずれも Brahman, Boddupalli Family の例，5¹は informant B. Koteswarasarama, 5²は B. Sriramachandramurti であり，5¹では Z が MBD 婚，その D を貰うことによって， $ZD=FZSD$ であり，5²においては両親の sister exchange によって， $ZD=FZSD=MBSD$ となる事例である。

図6は Vaishya, informant, Gudivada Sriramula の例，両親が ZD 婚，姉が ZD=MBD 婚として嫁ぎ，本人のばあい，ZD 婚ではないが MBD=FZSD 同時に親の ZD 婚によって，それは FBDD の事例である。なお，この例では y (younger) ZD 婚が2例みいだされる。同様な事例は図7，Gouda にもみいだすことができる。informant, Annam Pothuraju, こゝにも $ZD=FZSD$, MBD は親の ZD 婚により MZDD となる。これらの Vaishya や Gouda の事例は，いうまでもなく ZD 婚を原則とする婚姻とはいえないが，しかし図6，7にみられるように，少

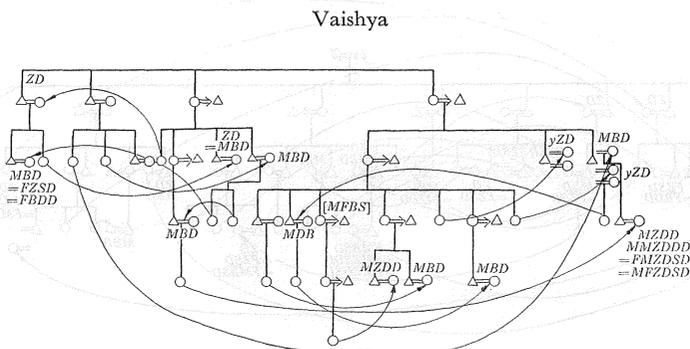


図 6

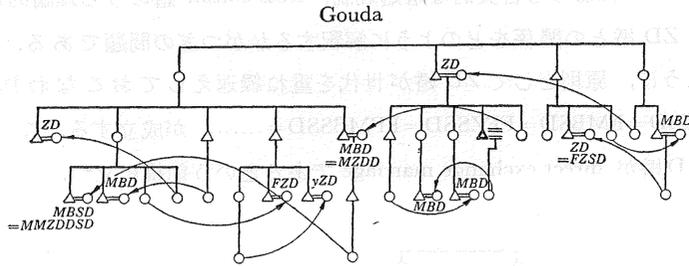


図 7

くとも MBD 婚を中心とする exchange marriage がおこなわれている，ということ是可以する。なぜならば，すでにみたように，Vaishya や Gouda は Brahman に比して，もともと通婚のサークルがせまく，そのせまいサークルのなかで交換としての結婚を，むしろ若い世代のものが Brahman に追隨して，MBD 婚をおこなっているからである。近い将来，これらの近親婚が減少していくとすれば，Vaishya や Gouda の人々は，Brahman におくれて，減少するだろう。

原則として ZD 婚による exchange marriage をおこなっている事例の 1 つとして，むしろこゝに Vaddera の例をみよう。図 8，informant, Tanneeru Kondiah, こゝには ZD 婚 3，ZD=MBD 2，ZD=FZSD 3，うち 2 例は ZD=FZSD=FMBSDD である。そして MBD=FZSD 2 である。これらは図 8 における他の近親婚，MBD 婚 2，MZD 1，FZSD 2，MBD=MZDD，FZSD=FBDD 1，FMBSDD=FMZSDD=FMZSD 1 を除外して，なお十分に ZD 婚を原則とする exchange marriage がおこなわれている事例を考察することができよう。ことわるまでもなく，ZD 婚を原則とするゆえに exchange marriage がもたらされたか，exchange marriage が ZD

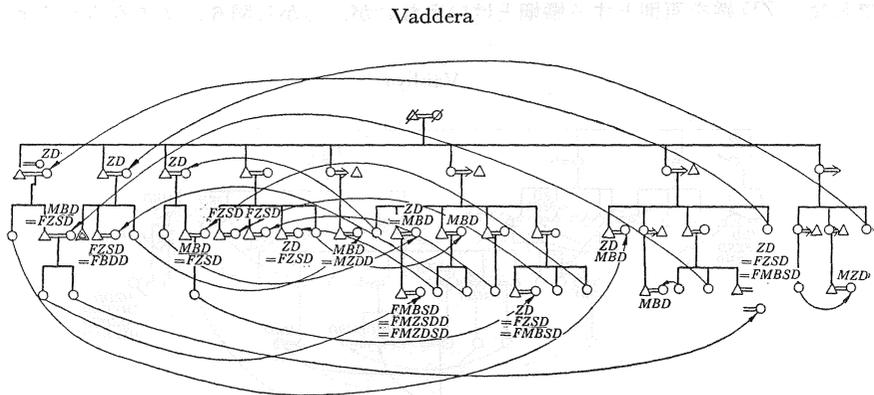


図 8

婚を選択させているか、はこゝでは問題ではない。この Vaddera の事例からみいだされることは、ZD marriage=exchange marriage としての、婚姻規制の Brahman への追従である。われわれは Vedullapalli における ZD 婚にもう一度立ちかえる必要がある。

6

表 4 にしめしたように、ZD 婚は全体で 55 事例、カースト別には Brahman に多く、なかでも Boddupalli Family に多い。この 55 例のうち、少なくとも direct exchange による ZD 婚、いゝかえるならば ZD=MBD あるいは ZD=FZSD, MBD=FZSD となる事例は、あわせて 19 事例、55 例の 34.5% にあたっている。ZD=MBD 7 (こゝには MBD 婚のつぎに ZD 婚がくる、すなわち MBD=ZD の事例をふくむ、以下同様)、ZD=FZSD 7 (うち 1 例は sister exchange のゆえに =MBSD となる)、ZD=MBSD (Z が MBS に嫁ぎ、その D を貰ったばあい) 1, MBD=FZSD 4 (うち 2 例は =FMBSD をふくむ) 計 19 例である。こゝには ZD 婚がすなわち direct exchange marriage であることがしめされている。このことは、ZD 婚が direct exchange としておこなわれるとすれば、それはまず ZD=MBD としてあらわれることをしめしている。そのことはこれら 19 事例のうち、FZD 婚と ZD 婚との exchange, すなわち ZD=MBSD の事例はわずかに 1 例にすぎない、ことにもしめされている。ZD 婚が MBD 婚の前段階であるか、あるいは ZD 婚の起源の問題は解ける問題ではない。むしろ、direct exchange と ZD 婚を結びつけて考えるとき、ZD 婚 = MBD 婚ということが出来る。《Menarikam》の内実とはこの ZD 婚 = MBD 婚のことをさしている。

この点で Karve¹²⁾ の南インド親族組織についての一般化は、いささか結論をいそぎ過ぎている。Karve によれば、まず第 1 に、a return of a bride としての ZD 婚があり、ついで FZD 婚が第 2 のタイプとしてあげられる。そして、FZD 婚はつぎの世代、FZD を貰った男よりも若い世代の女が ZD 婚によって返えられる。この the principle of return は、さきにふれた ZD = MBSD の事例のことである。Vedullapalli では、さきにみたように、まずなによりも FZD 婚は MBD 婚よりも少なく、さらに ZD=MBSD の事例はわずかに 1 例 (sister exchange の事例をのぞく) にとゞまっている。ZD=MBSD 婚の事例が多くみいだされないかぎり、FZD 婚を ZD 婚と結びつけて、南インドの婚姻のタイプとするには、いささか無理がある。もともと FZD 婚は、Brahman にとっては理論的には taboo であり、他のカーストをふくめて全体として MBD 婚よりも少ないと考えるべきである¹³⁾。

Karve は FZD 婚の説明に、つゞけて同一世代における exchange of daughters を FZD と MBD 婚による交換によって説明する。いゝかえるならば、FZ=MBW すなわち sister exchange の事例である。FZD 婚を exchange of daughters の原則から考えようとするかぎり、たんなる財産の相続にかぎらず、文字通りに、“In this respect father's sister's daughter marriage is like a lien which is satisfied in the next generation”.¹⁴⁾ と考えねばならぬはずである。そして、さら

に sister exchange は ZD 婚と cross-cousin 婚とを暗黙の前提として考える必要がある。こゝには ZD 婚とは独立の FZD 婚の説明があり、このことは第 3 のタイプ MBD 婚についても同様に、MBD 婚と ZD 婚とを別箇のものと考え、与える一方のみの MBD 婚が引用されている。exchange of daughters, the principle of retrun を考えるかぎり、Karve のいう第 1 のタイプ ZD による exchange, ZD 婚それ自身が exchange であると考えるとき、じつは ZD=MBD となるはずである。

Karve の要約について、例外を挙げるならば、yZD 婚は図 6 の Vaishya に 2 例（かなり特殊例ではあるが）、図 7 の Gouda に 2 例をみいだすことができる。yZD 婚が taboo といわれるかどうかは疑わしい。さらに MZD 婚もまた図 8 の Vaddera におけるように、稀な事例としては存在する。最後に Karve の提出した事例、MBD=MZDD の事例は Karve のいうように、こゝでも図 7 の Gouda、図 8 の Vaddera にそれぞれ 1 例ずつをみいだすが、FZD=MMZD の事例はこゝにもみいだすことはできない。たしかにこれらの婚姻を決定するには、“People seem to act according to convenience and the circumstances of a family in such cases”.¹⁵⁾ であるだろう。しかしこの convenience と circumstances を規定するのはまさに exchange of daughters であって、婚姻が exchange であるかぎり、南インドでは FZD ではなく、ZD と MBD、いゝかえるならば ZD=MBD が “rule for definite guidance” であるというべきであろう。

7

《menarikam》が exchange marriage, すなわち direct exchange としての ZD 婚, MBD 婚をさしているとすれば、問題は Vedullapalli における ZD 婚 55 例のうち、結果として exchange of daughters であることがみいだされた 19 例、すなわち 34.5% という率が、たしかに ZD 婚は exchange of daughters による結果である、といえるかどうかにかゝっている。MBD 婚や FBD 婚についてと同様に、交換としての ZD 婚の simulation model の開発による解釈が今後の課題の 1 つである¹⁶⁾。

ところでこれらの ZD 婚は Brahman, それも Boddupalli Family に多いことはさきにふれたとおりである。その他の Brahman との差が何をしめしているかは詳らかではない。いずれも家族数が少なく、その他の Brahman には近時転住の教師や郵便局長をふくむが、それらの家族をのぞいて、所有耕地規模を比較しても、Boddupalli, 15 acres 内外、その他の Brahman 11 acres 内外である。これらの土地も irrigation の有無によって大きく異なってくる。ただし、表 3 にしめしたように、Boddupalli Family には村内婚は 1 例もみいだされない。Vedullapalli において、村内婚を考える意味のないことはすでにふれたが、少なくとも村内で、その他の Brahman から Boddupalli Family への婚入は 1 例もなく、逆に Boddupalli Family からその他の Brahman への婚入はたゞ 1 例をみるに過ぎない。これらの差異もまたどのような意味をもつか、あきらかではない。しかし、少なくとも村在来の旧地主層である Boddupalli Family

と転入家族の多いその他の Brahman との間には、その婚姻規制にも差異がしめされることは想定できる。旧来の ZD 婚が若年層に減少しはじめ、村全体の農業が cropping pattern の変化にさらされ、近時中心地 Bapatla の指導層の 1 人、Brahman と Sudra との intercaste marriage が誰知らぬものない事件として喧伝されるどころにあって、Boddupalli Family の古典的婚姻規制がどこまで踏襲されるかは、カーストや親族を越えた問題であるだろう。

このことは Vedullapalli における minority としてのムスリムにもちょうどあてはまる。この Guntur Dist. のムスリムは Shaik, Saiyad, Pathan の 3 つの family title に限定されるが、口伝によれば約 200 年前 Nellore Dist. からの移住であり、Kandukur から Bapatla を経て本村への移住はきわめて新しく、さきにふれた Shaik Nabisaheb の家族をのぞき、大部分の Shaik Family をふくめて本村のムスリムは農業労働者として低い位置にある。このことと、少数例ではあるが、表 3 にしめしたムスリムの近親婚の高率とは無縁ではない。これらヒンドゥーに囲まれながらムスリム特有の婚姻規制がどこまで維持されていくか、これらはむしろムスリムを越えた問題であるやも知れない。Vedullapalli のモスクは村の有力者として Nabisaheb (5 年前に surpanch を務めた) のあっせんによって、2 年前 Vaishya の人々の寄進によって新築されたものである。

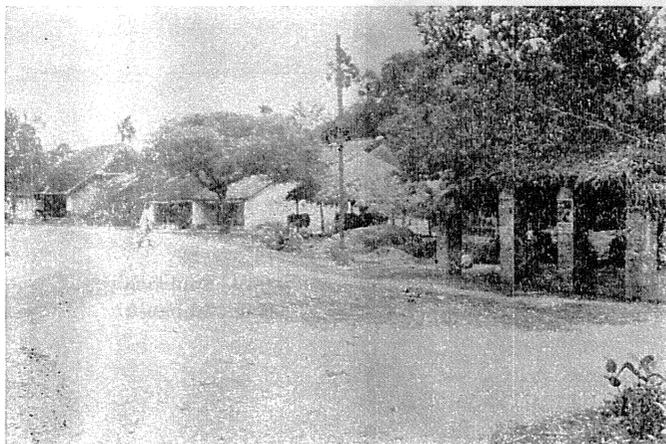
註

- 1) Census 1961 Andhra Pradesh, District Census Handbook, Guntur District, Part iv, 1965, Government of Andhra Pradesh.
- 2) 6 つの hamlet とは Vedullapalli のほかに, Upparapelem (30~35 世帯以下同様), Kothapalem (500), Yanadisangham (40), Kokkalavaripalem (20~25), Darivada Kothapalem (30) の 6 つである。
- 3) Bapatla Assembly Constituency Voters List, 1966.
- 4) Dube, S.C., Indian Village, 1955, p. 119.
- 5) Dronamraju, K.R. and P.M. Khan, "A Study of Andhra Marriages; Consanguinity, caste, illiteracy, and bridal age," Acta Genetica, 13 (1963), 21-29.
 —, —, "The Frequency and Effects of Consanguineous Marriages in Andhra Pradesh", Journal of Genetics, 58 (1963), 387-401.
 Dronamraju, K.R., "Le système des castes et les mariages consanguins en Andhra Pradesh (Inde), Population, 19 (1964), 291-308.
 —, "Mating Systems of the Andhra Pradesh People," Cold Spring Harbor Symposium, Quantitative Biology, 24 (1964), 81-84.
- 6) Dronamraju, "Mating Systems —", p. 38.
- 7) Dronamraju は、欧米に比して高率の近親婚をもつ日本に注目し、とくに Andhra People のデータと日本の比較の必要を結論として提出する。同上、84 頁。
- 8) Ishwaran, K., "Kinship and Distance in Rural India", in Kinship and Geographical Mobility, ed. R. Piddington, 1965, pp. 81-94.
- 9) Ibid., p. 94.
- 10) 拙稿「山村のイトコ婚—岐阜県徳山村」喜多野博士古稀記念論文集「村落構造と親族組織」(刊行準備中)所収。
- 11) Srinivas, M. N., Religion and Society among the Coorgs of South India, 1952. p. 30.

このようなカースト別婚姻規制を Sanskritization に結びつけて考察した事例に Orenstein, H., Gaon, Conflict and Cohesion in an Indian Village, 1965, pp. 68, 95 がある。

- 12) Karve, I., Kinship Organization in India, 1953, pp. 188-191.
- 13) FZD 婚が MBD 婚よりも少数の事例は Orenstein, op. cit., p. 95 にもしめされている。
- 14) McCormack, W., "Sister's Daughter Marriage in a Mysore Village," Man in India, 38 (1958), p. 48.
- 15) Karve, op. cit. p. 194.
- 16) イトコ婚についての simulation model の分析については前掲, 拙稿において日本のイトコ婚について適用, 若干の解釈を試みたが, ZD婚についてのモデルの開発は緊急の課題である。

本調査実施にあたって, 在マドラス吉川総領事はじめ総領事館の方々, 在バパトラ日印農場那須曠正理事長はじめ農場の方々, Bapatla Agricultural College, Principal I. Sambasiva Rao, Assistant Reddy., Gramasevaks, Director D.G. Ramarao, ほか Mr. K. L. N. Sarma ほかの方々には並々ならぬ御配慮をえた。こゝに誌して厚く謝意を申しあげたい。なお同行した大学院学生山本剛郎君には引き続きデータの整理までわずらわした。あわせて御礼申しあげたい。



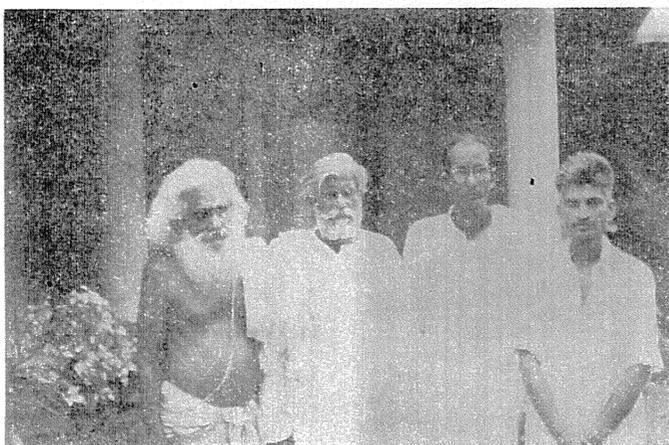
1 Vaishya の貸家



2 tea shop



3 タバコ苗床の水まき



4 指導者たち
左から Subbaiah 老,
Shaik Nabisaheb



5 Brahman の新築



6 流入世帯

IV Hindu Community in Andhra Pradesh

Vedullapalli in Andhra Pradesh is a farming village where 168 Hindu families and 21 Muslim families compose 189 families in total (1967). The inhabitants are classified into Brahman, Vaishya, Gouda castes and other lower one. Their field which is sandy is most fruitful seed-bed of tobacco. Irrigation Project of the state authorities and the increase of small tobacco enterprises has brought the cropping pattern to great change and those of Vaishya and Gouda castes to the advantage in economic position. For all that, the leadership in Vedullapalli lies in the hands of Brahman with Boddupalli family as the leader.

In the present paper, the writer is intending to talk about the following two problems; 1) what influence has such social mobility as mentioned above given to marriage circle of the village people? 2) in which relation does ZD marriage and cross-cousin marriage stand in this region? At Vedullapalli 1,093 marriage cases were investigated. Relating to 685 cases out of them, their native places are ascertained, particulars of which are as follows: inside the village 5.1%, inside taluka 40.1%, inside the district 46.0%, and outside the district 8.8%. Viewed from the distance, Vaishya and Gouda have often united their marriages with those who live not far from 20 miles away, while Brahman with those far from more than 20 miles away. The fact that marriage circle differs depending on caste will be necessarily true in inbreeding cases classified by caste.

There are 259 inbreeding cases which reaches to 23.7% of the whole 1,093. By caste, Gouda comes to 29.8%, Brahman 22.7%, Vaishya 16.2% which shows fairly low in rate with comparison to other castes. Supposing 259 cases corresponds to 100, ZD marriage comes to 21.2%, cross-cousin marriage 37.8%, and going into particulars, MBD marriage becomes 28.9% and FZD marriage 8.9%. In general MBD marriage counts highest, ZD marriage being often found in Brahman and FZD marriage in Gouda to some extent. Among 55 instances of ZD marriage such cases are 19 as ZD marriage has been repeated for generations, namely, the only one is at the same time ZD, MBD, FSZD, FMBSD and so on, resulting in 34.5% of all ZD marriages. There is no classificatory ZD in above 19 cases. In addition yZD marriage is found 4 instances among 55.

ZD marriage in Vedullapalli comes to relate to MBD marriage by the direct exchange of ZD. This is the true meaning of "menarikam". With relation to the above figure of 34.5%, it is requested for simulation models of ZD marriage to be developed in order to study not only the meaning of the figure with reference to bilateral cross-cousin marriage, but also whether yZD marriage is only an aberrancy of ZD marriage or not.

おわりに

I. ムスリムとして、I) East Bengal と II) Gujarat の調査の結果は、つぎのとおりである。

まず、両者ともに、ムスリム特有のすべての cousin marriage を許している。East Bengal においては、cousin marriage のうち、とくに patrilineal parallel cousin marriage が多いことが見出される。これらの FBD 婚、FFBSD 婚は、相続した家産の維持というよりも、むしろ経済的レベルの上昇の結果として、local ではあるがそれぞれの family title の形成に結びついている。たゞし、これらの patrilineal parallel cousin marriage によって、それぞれの family titled group がその地位を形成してきたか、あるいは逆に、titled group 形成への志向が patrilineal parallel cousin marriage を生み出したか、は詳かではない。もしこの関係をあきらかにできるとすれば、それは titled group 間の通婚関係についての解釈であるだろう。その解釈をこゝに提出することはできない。2つのことが指摘できる。第1に、titled group 間の通婚関係からして、East Bengal においては titled group は quasi-caste ではない。そして第2に、East Bengal における cousin marriage には“exchange”の意味がふくまれていない。“exchange”の意味をもたない cousin marriage、FBD 婚、FFBSD 婚、それが結果として family title の形成に結びついているという意味である。

それについて、Gujarat におけるムスリムにあっては、各 titled group 間に一定の通婚の規制がみいだされる。とすれば、これらそれぞれの titled group はまさしく quasi-caste と考えられるかどうか。そうではなく、各 titled group は Gujarat の家族として status-giving group であり、孤立したムスリムとして、ヒンドゥーにたいする deffence mechanism をもっている。この deffence mechanism の内実が、第1に、各 titled group 内における高率の inbreeding であり、第2に、Gujarat における婚姻、《satu》の意味を direct exchange of daughters にさせている。“exchange”を内包する cousin marriage であれば、結果として、MBD 婚の率を高くする。

East Bengal と Gujarat におけるムスリムの婚姻規制—総じてインドのムスリムにおけるそれはなによりも titled group が quasi-caste を構成しているかどうかが問題となる。それは各 titled group 間の通婚関係のあり方が1つの指標となる。各 titled group 間に通婚関係をもつ East Bengal においても、各 titled group 間に通婚関係をもたない Gujarat においても、titled group は quasi-caste ではない。そしてムスリム固有の婚姻規制—純血の保持と家産の維持といわれる patrilineal parallel cousin marriage への傾斜もまた、そのまゝの形ではみいだされない。インド、東パキスタンは、“Golden River から Golden Road”¹⁾の外にあるからである。それはすべての cousin marriage を許容しながら、あるいは titled group 形成への志向と FBD 婚が結びつき、あるいはまた、titled group 維持と MBD 婚が結びついて、ヒンドゥーとの共存

のなかで、ムスリム固有の婚姻規制は屈折した形をとらざるをえない。

II. 南インドには、南アメリカと並んで、現在 *cousin marriage* とともに *sister's daughter marriage* がおこなわれている。III) Mysore と IV) Andhra Pradesh の調査の結果はつぎのとおりである。

Mysore の *ZD marriage* は *bilateral cross-cousin marriage* と結びついている。*ZD marriage* と *cross-cousin marriage* との関係は理論的にあきらかにされてはいない。*bilateral cross-cousin marriage* との関係において、Mysore の *ZD marriage* はいずれかといえば *FZD* 婚よりも *MBD* 婚に結びついている。*oblique marriage* として、*ZD marriage* は *classificatory terminological system* との関係において固有の困難を内包する。しかし、*terminological classification* は *ZD marriage* を生みだしはしない。なぜならば、*eZD* と *yZD* との区別は、世代とは独立の *age-based difference* を成立させているかどうか、あきらかではないからである。Mysore における *ZD marriage* はつぎの2つの課題を与えている。1) *classificatory relationship* を除外して、世代を重ねて *ZD marriage* がおこなわれているばあい、すなわち *actual genealogy* において、同一人が *ZD=MBD=FZSD=FMBSD*……である率はいくらか。2) *ZD marriage* のうち *eZD* と *yZD marriage* の率は如何。

Andhra Pradesh において、この2つの課題にたいする回答はつぎのとおりである。総婚姻事例1,093において近親婚の率は23.7%である。近親婚事例259を100とすれば、*ZD* 婚21.2%、*MBD*婚28.9%、*FZD* 婚8.9%その他である。1) *ZD* 婚事例55のうち、同一人が *ZD=MBD=FZSD=FMBSD*……の事例と考えられる事例は19である。すなわち *ZD* 婚のうち、世代を重ねて *ZD* 婚を繰返すことによって、結果として *MBD* 婚である事例は *ZD* 婚の34.5%である。2) *ZD* 婚のうち *yZD* 婚の事例はわずかに4である。*yZD* 婚が *ZD* 婚の *aberrancy* であるかどうかはあきらかではない。*marriage statistics* は、*ZD marriage* が *normative repetition* であるかどうかにかん答えるものではないことは、ことわるまでもない。34.5%という率のもつ意味は、*ZD marriage* についての *simulation model* の開発を要請する。その後、ドラヴィダの伝統と“*Headhunter's heritage*”²⁾との比較は新しい意味を与えられるだろう。

註

- 1) Patai, R., *Golden River to Golden Road*, 1961.
- 2) Murphy, R.F., *Headhunter's Heritage*, 1960.

付 記

本稿校正中に、*ZD marriage* を主題とする本格的な *field work* にもとづく2つの業績に接した。i) Yalman, N., *Under the Bo Tree* (1967) と、ii) Rivière, P., *Marriage among the Trio* (1969)である。とくに ii) は、人類学者である著者の社会学的接近として、未開社会における年齢、*conscious model* と *appetitive model* など、検討しなければならぬ多くの問題をふくんでいる、ことを付記したい。

Conclusion

I

The results of survey on East Bengal and Gujarat centering on the Muslim are as follows.

First of all, in both of the communities is sanctioned the custom of cousin marriage which is peculiar to the Muslim. In East Bengal patrilateral parallel cousin marriage prevails in particular. The continuance of the marriage rules of FBD and FFBSD is rather due to their economic ascent which prompts them to the formation of family titles even if it still remains local than to the necessity of maintaining their inherited family property. It is not certain, however, whether the patrilateral parallel cousin marriage has made family titled group to form their social rank, or conversely such marriage was brought about by the intention of forming titled group. It seems necessary to give an interpretation to the marriage connection between these titled groups in order to solve the above. To his regret, the writer is not ready to present the interpretation here, except the following two indications. First, in the light of marriage connection between the titled groups, those in East Bengal are not quasi-caste, and secondly, the nature of "exchange" is not included in cousin marriage cases in East Bengal. In other word, cousin marriage, FBD and FFBSD marriage never endowed with the nature of "exchange" leads to the formation of family title.

In Gujarat, on the other hand, there are some restriction in marrying between each of the titled groups of Muslim. Then can we suppose each of the titled groups as quasi-caste? No, not so. Each of the titled groups functions as status-giving group among all the families in Gujarat, and at the same time possesses defence mechanism against the Hindu as the isolated Muslim. This defence mechanism is closely associated with the high rate of inbreeding within the titled groups and characterizes the meaning of "satu" in Gujarat with "direct exchange of daughters". Cousin marriage including "exchange" results in heightening the rate of MBD marriage.

When we consider the regulations in marriage of the Muslim in either East Bengal or Gujarat, and what's more in all India, it should be called to account before everything else whether titled groups constitutes a quasi-caste. The way how the titled groups are united in marriage with each other is supposed to be suggestive to it. Taking this into view, every titled group is not said to be a quasi-caste either in East Bengal where titled groups are connected in marriage with each other or Gujarat where such connection is not found. In addition, the regulations in marriage peculiar to Muslim community which is represented by patrilateral parallel cousin marriage do not persist as they were expected, when they had main purposes to keep their blood pure and to preserve their family property. It is mainly because both India and Pakistan are located outside of "Golden River to Golden Road".¹⁾ Though all kinds of cousin marriage are sanctioned, on one occasion, FBD marriage is selected under the intention to form a titled group or on another occasion MBD marriage is preferred for the purpose of maintaining the titled group, as the result of which, the marriage regulations of their own could not help suffering a change under the circumstances of their coexistence with the Hindu.

II

In southern India in common with South America sister's daughter marriage is now going in parallel with cousin marriage. The survey results concerning the custom in III) Mysore and IV) Andhra Pradesh.

In Mysore ZD marriage is connected with bilateral cross-cousin marriage. No particulars are known theoretically about the relation of ZD marriage and cross-cousin marriage. With

the view to its relation to bilateral cross-cousin marriage, ZD marriage of Mysore is rather connected with MBD than with FZD marriage. Because of oblique marriage ZD marriage involves some peculiar difficulties with the relation to classificatory terminological system. But terminological classification does not call ZD marriage into being, for it is not still apparent whether difference between eZD and yZD is an age-based difference independently apart from generation. Relating to ZD marriage of Mysore two following problems are presented. 1) what percentage does such case come to as ZD marriage is repeated for generations except classificatory relationship, in other word, the sole one is in actual genealogy ZD, MBD, FZSD, FMBSD and so on? 2) How is the cases of eZD and yZD marriages among ZD marriage?

The answer to these questions which was acquired in Andhra Pradesh is as follows. Inbreeding cases come to 23.7% of 1,093 marriage cases. Supposing the whole inbreeding cases 259 as 100, ZD marriage comes to 21.2%, MBD marriage 28.9%, FZD 8.9% and the rest is other cases. 1) 19 among 55 cases of ZD marriage are supposed to be those cases that the only one is at the same time ZD, MBD, FZSD, FMBSD and so on. Namely, the cases in which MBD marriage is the result of repetition of ZD marriage for generations, amount to 34.5% of ZD marriage. 2) Only 4 yZD marriage is counted in ZD marriage. It is still questionable whether yZD is an aberrancy of ZD marriage.

There is no need to mention that marriage statistics does not always give answer to the problem whether ZD marriage is normative repetition. Before we know the meaning of the figure of 34.5%, it is required for some simulation model of ZD marriage to be developed. Then some new meaning is given on comparing to Dravidian tradition and "Headhunters's heritage"²².

Notes

- 1) Patai, R., *Golden River to Golden Road*, 1961
- 2) Murphy, R.F., *Headhunter's Heritage*, 1960